

「実践的思惟」としてのリアリズム：
永井陽之助の政治学と「アメリカン・ソーシャル・
サイエンス」

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-06-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中本, 義彦 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00009553

「実践的思惟」としてのリアリズム

——永井陽之助の政治学と「アメリカン・ソーシャル・サイエンス」¹

中本義彦

∴ what matters here is Aron's rejection of any science that gives to the forms of behavior it studies explanations *contrary* to or *divorced* from the meaning understood by the participants.

On this point, his theory differs from practically all American theories of international relations ...

——Stanley Hoffmann

はじめに

アメリカの国際関係理論をどう受け止めるべきか。この問題は、日本を含むアメリカ以外の国の研究者にとって、大きな問題であり続けてきたし、今後も当然の間そうなりそうである。というのも、スタンレー・ホフマンがかつて

言明したように、国際関係論という学問分野は、アメリカにおいてのみ本格的に発展し、よきにつけ悪しきにつけアメリカ的色彩を帯びた「アメリカン・ソーシャル・サイエンス」である。その状況はかなり改善されてきたとはいえず、いまもなお国際関係論、なかでも一般理論の中心地はアメリカであるといつて差し支えないだろうからである²⁾。

幸か不幸か、こうした傾向が最も顕著な分野のひとつは、近年、国際環境の悪化とともに再び脚光を浴びてきたアプローチ、つまり「リアリズム」である。周知のように、国際関係論という「新しい学問」の確立と、現代におけるリアリズムの復権は、ほぼ同時に進行した。そして双方の必要性を説いた最初の思想家は、E・H・カー(一八九二〜一九八二)というイギリス人であった。しかし、この第二次世界大戦前の先駆的努力を戦後になって継承したのはアメリカ人たちであり、リアリズムは主として「新世界」で発展した。国際関係論が学問として確立したのはアメリカにおいてであり、ここではハンス・モーゲンソー(一九〇四〜一九八〇)らの説く「クラシカル・リアリズム」が当初から約四半世紀にわたって大きな影響力を行使した。その後、一九七〇年代末から再び議論の中心になったのもアメリカ産のリアリズムであり、ケネス・ウオルツ(一九二四〜二〇一三)が構築した「ネオリアリズム」が次の四半世紀の間、知的覇権を握った。そして現在も、リアリズムは、シカゴ大学のジョン・ミアシャイマー(一九四七〜)の説く「オフエンシヴ・リアリズム」とそれに反発する「ディフェンシヴ・リアリズム」等へと形を変え、それらが示唆する政策とともに国際関係論における大きな争点のひとつとなっている。

われわれは、これらの新しいリアリズムをどう受け止めるべきなのか。そのようなアプローチが提示されるなかで、われわれを取り巻く国際的「現実」をどう理解し、どのような処方箋を書けばよいのか。

こうした問題を考える手がかりとして参考になるのは、過去の事例であろう。文脈はかなり異なるとはいえ、日本

においても、国際関係理論の研究とリアリズムは、かなりの程度歩みを共にしてきた。そして、戦後の日本において「現実主義者」と呼ばれた人たちが、アメリカの「リアリズム」をかなり深く理解していたことは疑いない。では、彼らは、それをどう評価していたのだろうか。そこから何を受容し、何を受容しなかったのか。日本の「現実主義」とアメリカの「リアリズム」の共通点と相違点は何か。そもそも日本のリアリズムの特徴とは、何だったのか。そしてそこから、われわれが学ぶべきものは何か。

本稿では、高坂正堯（一九三四～一九九六）とともに戦後日本の現実主義の旗手とみなされ、理論面ではおそらく最もすぐれた業績を残した永井陽之助（一九二四～二〇〇八）のアプローチに焦点を当てて、これらの問題を考えてみたい。永井のリアリズムの特徴のひとつは、それが彼のいう「実践的思惟」の性格を色濃く帯びていることにあり、その点こそがアメリカで構築されてきた「リアリズム」(の大半)とコントラストを成していると思われる。それでは、永井にとって「実践的思惟」とは何だったのか。永井はそれを、どのようにして形成したのか。われわれは、「実践的思惟」をどう評価すべきなのか。生前の永井が「自分が言いたいことは、ほとんど出ている」と語っていた彼の初期の業績を主軸にし、そこで表明されている方法論と、それが生み出された背景に光を当てながら若干の考察を試みてみよう。

私見によれば、永井のいう「実践的思惟」は、

一、行為者が自身の行動をどう意味づけているかの了解（そして、その前提となる、行為者が置かれた「歴史的状況」の全体像の素描）

二、行為者にとって効果的な選択の範囲の画定
 三、政治的行為者の自律的参加の促進

を構成要素とする。それは、永井という異才がアメリカの国際政治学者よりも主として社会学者のデイヴィッド・リースマン(一九〇九〜二〇〇二)との対話のなかで培ったものであり、その後にはリースマンと「類似した」アプローチをとる、(オーストリア生まれで)フランス出身の国際政治学者であるスタンレー・ホフマン(一九二八〜二〇一五)の業績と出会うことによって発展させられたものである。そして、そこにこそ、「アメリカン・ソーシヤル・サイエンス」の直輸入でない、ユニークな国際政治学が生成された主な理由と、その意義の源泉が存在すると思われるのである。

(注)

¹ 本稿は、日本国際政治学会二〇一五年度研究大会(仙台)の「部会十二 戦後日本の『リアリズム』の射程——歴史・理論・実践」の報告ペーパーを大幅に加筆・修正したものである。部会を企画してくださった武田知己氏、ともに報告者をつとめていただいた佐道明広氏と春名展生氏、討論者をつとめていただいた福田毅氏と森田吉彦氏、司会をつとめていただいた鈴木宏尚氏に厚く御礼申し上げます。本稿を、一九八八年の『外交フォーラム』創刊時に編集作業のお手伝いをさせていただいて以来、長年にわたってお世話になった、粕谷一希先生(一九三〇〜二〇一四)に捧げる。

² Stanley Hoffmann, "An American Social Science: International Relations," in *Janus and Minerva: Essays in the Theory and Practice of International Politics* (Boulder, CO: Westview, 1987), pp. 3-24. 邦訳「中本義彦編訳『スタンレー・ホフマン国際政治論集』(勁草書房、

二〇一一年)、第四章。ヘドリー・ブルも、「今世紀(二十世紀)における国際関係理論を一見してわかることは、西欧、とりわけアングロアメリカの理論が圧倒的なところにある」と述べている。Hedley Bull, "The Theory of International Politics, 1919-1969," in Brian Porter, ed., *The Abersyth Papers: International Politics 1919-1969* (London: Oxford University Press, 1972), pp. 54-55. 邦訳「猪口孝訳『国際政治理論』一九一九〜一九六九の通観」猪口孝編『国際関係論リーディングス』(東洋書林、二〇〇四年)、所収「四九〜五〇ページ、参照。なお、この点に関する最近の論考として、Miles Kahler, "International Relations: Still an American Social Science?" in Linda B. Miller and Michael Joseph Smith, eds., *Ideas and Ideals: Essays on Politics in Honor of Stanley Hoffmann* (Boulder, CO: Westview, 1993), pp. 395-414; Robert M. A. Crawford and Daryl S. L. Jarvis, eds., *International Relations: Still an American Social Science? Toward Diversity in International Thought* (New York: State University of New York Press, 2001); Arlene B. Tickner and Ole Weaver, eds., *International Relations Scholarship Around the World* (New York: Routledge, 2009). 石田淳『国際関係論はいかなる意味においてアメリカの社会科学か——S・ホフマンの間』(一九七七年)再考、日本国際政治学会編『国際政治』第一六〇号(二〇一〇年三月)、一五二〜一六五ページ、なども参照。ホフマン自身のコメントとしては、マイケル・スミスのインタヴューで拙訳の「伝統的國家観の崩壊を前に」『外交フォーラム』一九九六年八月号、一九ページを参照。

一、《認識象徴》と《組織象徴》

永井の初期の業績を通覧して、まず気づかされるのは、彼が早くから政治学そのものを「実践的思惟」にならざるをえないものとみなしていたということであり、そうすることによってのみ「学としての政治学」を確立する途が見出されると考えていたということであろう。周知のように、永井はもともと国内政治の研究者であり、滞米中にキューバ危機に遭遇したことをきっかけに国際政治の研究を開始した。そして、注目すべきは、上記の考えが、滞米以前の初期の研究のなかですでに明らかにされていることである。粕谷一希がかつて指摘したように、「永井政治学の枠組み

と方法、現代日本政治への視点は、ほぼこの期間「最初の論文を書いた一九五五年から滞米する前の六一年」に基本的に出来上がっていた」のであり、永井の滞米生活は、「いまだ未完成の留学生生活ではなく、成熟した学者としてのアメリカ体験だった」といってよい。³つまり、アメリカの国際関係理論に本格的に対峙したとき、永井はすでに自身の「実践的思惟」を確立していたのであり、そこに彼のリアリズムの独自性の源泉のひとつが存在すると思われるのである。

それでは、なぜ政治学は「実践的思惟」たらざるをえないのか。どうすれば、「実践的思惟」に裏打ちされた政治学を構築できるのか。一九五五年から六一年にかけて執筆し、後に『政治意識の研究』に収録された諸論文において、永井は二つの道を通じて、この結論に到達しているように思われる。⁴

ひとつは、論理実証主義の克服である。永井にとってそれは、旧制中学時代からの馴染みのテーマであり、思想的原点のひとつだった。当時の知識人の多くは二十世紀初頭の科学革命、実証主義革命の洗礼を受けたのだが、知的エリートといってもよい家庭環境にあった青年・永井もその例外ではなかった。⁵とくに終生もつとも近い存在の一人であった次兄・成男⁶がウィーン学団の論理実証主義に惹かれ、その影響を受けて永井も科学哲学に親しんだ。

理論物理学がもっているような客観性と公開性、体系性と厳密性を基準にして社会科学も構築されるべきではないか。物理学と同様に社会科学においても「科学的」検証による独立変数と従属変数の確定は可能であり、「真なる命題は検証可能な命題であり、偽なる命題は反証可能な命題である」といえるのではないか。こうした考えは、旧制高校から学徒出陣し、復員後に「まったくの偶然」から政治学を学ぶことになった⁷後も、永井を強く捉えていた。その論理実証主義を、ノイローゼになるほど思い悩んだあげく、彼なりに納得のいく形で相対化したのである。

『政治意識の研究』に収録された諸論文⁸で永井がとくに問題にしたのは、(狭義の)論理実証主義における「認識象徴」と「組織象徴」の峻別であった。論理実証主義においては、「一定の政治的行動ないし組織を記述・分析・説明するための用具としての記号」と「一定の社会集団のもつ行動様式や組織の正当性を剥奪するか、あるいは、新しく発生しつつある社会集団の行動様式に正当性を賦与し、人間の行動様式を組織化していく『価値記号』」とを区別し、前者のみを学問体系に取り入れようとする。永井が一九五〇年代に著書訳出の労をとったハロルド・ラスウェルにしてもT・D・ウェルドンにしても、認識目的達成の効率という観点から事物言語を定義し、それによって得られた「認識象徴」だけによって政治学を構築しようとする点では共通していた⁹。

そうしたアプローチが必要であることは永井も否定していない。「しろうとではお手あげのような、精緻で美しい体系が一方で確立されることが重要」であり、「巨大な岩盤として建設されることが望ましい」とさえ彼は述べる。しかし、そうした体系と向き合って、「その途を選んでもフレーム・ワークの選択、問題の選択についての客観性を得ることとはできないかもしれない」と自省する内なる声、そこから始まるもうひとつのアプローチも必要不可欠であると永井は結論した¹⁰。

その際に永井が依拠したのが、自身のアプローチの特徴として生前しばしば口にし、次節で言及するドイツ・ロマン主義ともおそらく無関係ではない、「実存」であった¹¹。永井によれば、一方でわれわれは、「すべての象徴体系は経験的に検証しうる科学シンボルなのだ」などと錯覚してはならない(そうすれば俗流マルキストのように独断的教条主義に陥ってしまう)。しかし他方で組織象徴に喚情的意味しか認めず、それを宣伝としてアプリ・オリに拒否することも許されない。というのも、人間は「実存の要請」として組織象徴を必要とするからである。

人間は、他の動物とちがって、自意識をもち、〈私〉とか〈われわれ〉というシンボルを使用することのできる唯一の動物であって、人間は、何かを知っていることを知る存在である。自己のイメージを反省する能力もっている。サルトルのことはをかりれば、人間は、他者から見られることによって、自己がかわる〈対他的存在〉である。このことは、人間が、自然や社会に適應していくとき、動物のような即自的な調和感や安定感はありません。ず、なんらかの象徴体系を媒介として、はじめて安定感を確保しうる存在であることを意味している。¹²⁾

人間社会、とくに資本主義とテクノロジーが発達し、長きにわたって拘束された神や階級支配から逃れた人びとが生きる現代の大衆社会に予定調和はない。個人は、つねに不確実性と不安と不満と精神的な不毛のなかに生きざるをえない。そして、そうであるがゆえに、「自由」「民主主義」「民族」「平和」といった組織象徴への帰属や同一化は、「人間」と他の自然との調和ある均衡を回復しようとする一つの絶対的要求(エーリッヒ・フロム)となる。それは「最もふかい人間の内的な渴望」なのであり、そうであるがゆえに、「政治理論上の象徴(記号)ないし象徴体系は、多かれ少なかれ「認識象徴と組織象徴という」二重の意味と機能をもっている」と考えられるのである。¹³⁾

こうして、政治状況を認識しようとするとき、われわれは同時にそれを規定しているのだと永井は主張する。たえず流動するもろもろの契機が錯綜する世界を完全に認識することは不可能であり、そうであるがゆえに、われわれは自分の視座と利害から、その都度状況を規定している。(因果関係)の認識として、〈原因〉とは往々にして「人間の意識と行動の上で〈管理可能なもの〉」であり、〈結果〉とは「人間の意識と行動の上で〈期待可能なもの〉」である。そして多数の要因のうち何を〈管理可能なもの〉〈期待可能なもの〉として選択するかは、「実践的な立場によって異ならざ

るを得ない」。つまり、政治理論は、その本質上、実践と分離しがたいものであると永井は考える。

たとえ「世界認識における検証可能性・厳密性の問題」が重要であるとしても、それを過度に追求すると「人間の实在の深い問題」から離れた分析しかできなくなるのではないか。それは正確で、厳密で、膨大な調査によつて検証され、科学的かもしれないが、往々にして「イヌが東を向けば、シッポは西を向く」といった類いの陳腐な結論に終わるのではないか。「人間が自然や社会に対して適応していく場合に、主体としての安定感を得るために不可避的に必要なシンボル体系（思想、イデオロギー）」というか、人間に生甲斐を与え、幸福感を与えるような意味での「有用性」をもたない無味乾燥な研究になるのではないか。永井は、こう考えるようになっていたのである。¹⁴

(注)

³ 粕谷一希「永井政治学の思想的性格」、永井陽之助編『二十世紀の遺産（文藝春秋、一九八五年）、所収、六一〇ページ。

⁴ 永井陽之助「政治意識の研究（岩波書店、一九七一年）。この二つの「原体験」については、酒井哲哉「永井陽之助と戦後政治学」、日本国際政治学会編『国際政治』第一七五号「歴史的文脈の中の国際政治理論」（二〇一四年三月）、七一ページ、参照。

⁵ 大正十三年（関東大震災の翌年）に東京で生まれた永井は、四歳から福島県の須賀川で育った。父・力は鹿児島県串良町出身。大正二一年に東京帝国大学医学部卒業後、引き続き副手として勤務し、同七年に郡立岩瀬病院（明治初期に後藤新平が学んだ須賀川医学校の後身）に赴任した。十一年に副院長となり、十三年に母校帝大に留学（六年後に医学博士取得）。陽之助はそこで三男として生まれている（長男は九州帝国大学医学部を卒業し戦後に横浜で医院を営んだ功、次男は成男）。昭和二年に父が公立岩瀬病院に帰院。同四年には院長となり二十二年まで在職、二十五年まで医師として勤務した。『公立岩瀬病院小誌』（佐藤正一、一九三一年）、『公立岩瀬病院史』（公立岩瀬病院組合、一九五二年）、渡辺磔『公立岩瀬病院百年史』（公立岩瀬病院組合、一九七二年）、参照。『公立岩瀬病院百年史』を閲覧させてくださった公立岩瀬病院の塩田卓氏に謝意を表したい。

厳しい父のもとで育った永井は、どちらかというと「家で遊ぶことが多い、ひ弱な子供」だったという。世界文学全集に夢中になる文学青年だった。また、東京出身で芸術好きだった母の影響もあり、絵を描くのが好きで、旧制安積中学では美術部員として絵画博覧会で一等を受賞した記録が残っている(晩年も「趣味の絵に時間を割きたい」といって「写生も残していた」らしい)。日米開戦を告げる大本営発表のラジオ放送を下宿先の開成山大神宮で聞き、その三ヵ月後に旧制中学を卒業。仙台の旧制二高文科乙類(ドイツ語履修)に進み、一年間の肺結核療養後、昭和十九年に学徒出陣で台湾の速射砲隊に入隊した。だが、間もなく肺結核が再発して入院。おかげで厳しい軍隊生活は回避できたが、その後、腸チフスにかかり、病棟で爆撃機の機銃掃射にあっている。終戦後に、いくつかの「奇跡に近い偶然」が重なって無事復員し、昭和二十年に二番で二高を卒業。東京大学法学部政治学科に入学し、一年余の療養の後、政治学徒としての生活を開始した。上山春平・江藤淳・沢田允茂・富永健一・永井陽之助・山崎正和(特別シンポジウム)哲学の再建「中央公論」一九六六年一〇月号、四六〜一一ページ、「安中安高百年史」(福島県立安積高等学校創立百周年記念事業実行委員会、一九八四年)、一〇三〜一〇六ページ、永井陽之助「二十世紀と共に生きて——安積時代の思い出」、創立百周年記念事業出版委員会編「安積一〇〇年誌」(福島県立安積高等学校、一九八五年)、所収、三二〜三九ページ、永井陽之助「二十世紀と共に生きて」、前掲「二十世紀の遺産」、所収、一三〜一八ページ、「命救われた氷の山——永井陽之助さん」、毎日新聞地方部特報班「東北の一〇〇人」(無明舎出版、一九九六年)、所収、一八七〜一八九ページ、永井の講義録(一九九九年頃、青山学院大学)、および、「墓碑銘」『平時こそ戦争を研究せよ』永井陽之助さんの現実主義』『週刊新潮』二〇〇九年四月二日号、一五五ページ、を参照。以下の伝記的記述も主として、これらの文献によっている。「安積一〇〇年誌」に収録されている永井の創立百周年記念講演録を見せていただいた安積高等学校教頭の鈴木康友氏、講義録を見せていただいた大徳貴明氏に厚く御礼申し上げます。大徳氏が作成した「永井陽之助教授の著作目録」『青山国際政経論集』永井陽之助教授退任記念号、第五〇号(二〇〇〇年六月)、九〜二九ページは、ほぼ完全であり、本稿執筆にあたっても適宜参照した。永井が安積中学五年の時に下宿していた場所を教えていただいた開成山大神宮の宮本氏にも謝意を表したい。

東京医科歯科専門学校(一九四四年卒)、早稲田大学哲学科(四九九年卒)、同大学院(五七年修了)を経て分析哲学者になり、一九九二年まで東洋大学短期大学教授を務めた。最初の著書は「分析哲学——言語分析の論理的基礎」(弘文堂、一九五九年)であり、その「はしがき」には「有益な助言と示唆とを与えてくれた政治学専攻の弟陽之助」に対する謝辞が記されている。陽之助にとって成男は生涯大きな存在であったようで、二〇〇八年一月に陽之助夫人からいただいた筆者宛の葉書には、「学問的に大へん刺激され影響を受けた兄(哲彦)が急逝してから体調を崩し」と記されていた。この年の一月三〇日に陽之助も逝去した。

7 そもそも政治学を選んだのは、次兄の成男であり、永井自身ではなかった。永井が復員後に病床で苦しんでいる間に、弟の資質をよく

知る成男が、本人に相談することなく東京大学法学部政治学科に志望書を提出したのである。

⁸ とくに、「認識の象徴と組織化の象徴——ウェルドンの『政治学の用語』をめぐる」（一九五六年）、「マス・デモクラシーと政治的大衆運動」（一九五七年）、「現代政治とイデオロギー——組織論のための序説」（一九五八年）、「イデオロギーと組織象徴」（一九六一年）、「政治学の基礎概念——現代政治学的方法論的基礎」（一九六〇年）を参照。

⁹ H・D・ラスウェル、永井陽之助訳『権力と人間』（東京創元社、一九五四年）、および、T・D・ウェルドン、永井陽之助訳『政治の論理』（紀伊國屋書店、一九六八年）、参照。

¹⁰ 前掲「哲学の再建」、七六ページ。

¹¹ 「かつて私との何げない会話のなかで、

——これからの社会科学は、マルクシズムやプラグマティズムではなく、実存理論によって基礎づけられるべきだ。

と洩らされたことがある」と粕谷一希は記している。前掲「永井政治学の思想的性格」、六一八ページ（なお、粕谷一希『戦後思潮——知識人たちの肖像』（藤原書店、二〇〇八年）に収録されている「永井陽之助の実存感覚」も参照）。筆者も永井が同じことを述べているのを何度か聞いたことがある。その際、永井は「丸山さんの政治学も結局はマルクス主義に基礎づけられている側面がある」と語っていた。永井の政治学の実存主義的側面については、中山俊宏「追悼 永井陽之助——人間の实存と向き合った政治学」『中央公論』二〇〇九年五月号、一六六〜一六七ページ、および、酒井哲哉「永井陽之助と戦後政治学」、七三ページ、も参照。なお、永井は『政治意識の研究』において、すでに「実存」という言葉を使用している。一一〇、三二六ページ、参照。

¹² 前掲「イデオロギーと組織象徴」、一八二ページ。

¹³ 前掲「認識の象徴と組織化の象徴」、九二ページ。

¹⁴ 前掲「イデオロギーと組織象徴」、一八四〜一九〇ページ、一九五〜一九八ページ、および、前掲「哲学の再建」、五三〜五四、八七ページ参照。

二、迂回的アプローチ

それでは、どのようにすれば「リアルな、内容のある政治学」の業績を、つまり「実践的思惟」による具体的な成果を出すことができるのか。こう永井は、自問した。そして興味深いことに、ここでも青年時代に取りつかれたイデオロギーを克服するプロセスの先に答えを見出している。

そのイデオロギーとは、ある意味で論理実証主義の対極にあり、それと相矛盾するともいえるドイツ・ロマン主義であった。戦時中であっても永井は、「日本の軍国主義には共鳴しなかった」。しかし日米開戦の翌年に入学した仙台の旧制第二高等学校で、若い気鋭のドイツ語教師にすっかり感化されてゲーテに凝り、『ゲオルゲ詩集』に代表される神秘主義的な美学や文芸哲学に魅せられた。また、シュペングラの『西洋の没落』を原書でひもといたり、ニーチェの『アンチ・クリスト』を訳してクラスの同人誌に掲載したりして、そのムードに浸った。そして、それが昂じて「ナチズムのイデオロギー、とくにユダヤ問題という一種の神秘主義的な歴史の陰謀説」に取りつかれてしまったのである。

このナチズムの人種主義的イデオロギーから永井がいつ解放されたのかについて彼はどこにも記していないし、そのプロセスについても論理実証主義の場合ほど明確にはわからない。永井の回顧によれば、戦争が終わって復員し、大学の授業に出始めてからも、彼は「懐疑的な反動学生」であった。「わが国は文明と理性にやぶれたのだ」という南原繁の講話にも「新生日本」の「民主革命のムード」にもついていけなかった。

たしかに八紘一宇や大東亜共栄圏、またナチの生存圏や人種イデオロギーとかに比べたら、連合国のとなえる民主主義や大西洋憲章のほうがより多くの人びとの心に訴える普遍性を持ち、その宣伝効果の点では、はるかに洗練され、すぐれていたことは認めるが、要するに、それもパワーの一部ではないのか。われわれは、科学、技術、生産力、戦略戦術、イデオロギー、情報や宣伝、すべての点で力が劣っていたから敗けたのであって、わざわざ、文明や道義の敗北などという必要はないのではないか。¹⁵

こうした「観念のレベル」の違和感をぬぐえなかったと永井は語っている。

しかし、当時の多くの日本人と同じように、「感性のレベル」では永井もたしかに解放されつつあったようである。横浜から本郷への通学途中で見える「軽快なジープを駆って陽気に口笛を吹く進駐軍兵士（GI）の姿」、雑誌の記事から垣間見える「アメリカ市民生活の豊かさ」と開放感¹⁶、復員後に初めて見た映画『アメリカ交響楽』（ブロードウェイの寵児となった作曲家ガーシュウィンを描いている）の「圧倒的な迫力」を永井は回顧している。こうしたなかで永井は、「民主革命のムード」のみならず自身の「観念」とも折り合いがつけられなくなっていたのではなからうか。そうした行き詰まりのさなかに政治心理学の勉強を勧めたのがゼミの教官の丸山眞男であった。ユダヤ問題についておぼおぼと質問した永井に対して、「ユダヤ問題の本質がどういうものか、それが正しいか否かの問題より、ワイマール時代のドイツの一部が、なぜ反ユダヤ主義（アンチセミティズム）を支持したのか、その社会心理学的背景の分析をやる必要がある」と丸山は示唆したのである。

それは、永井にとつて、「十代の青春期になぜナチズム、とくに反セミティズムの歴史陰謀説の魔力にとりつかれて

いったのか」という自分自身に対する真剣な問いかけともなった。こうして彼は、当時の政治学研究室で必読文献とみなされていたマックス・ヴェーバー、カール・マンハイム、エーリッヒ・フロムなどの著作に出会う。そして、北海道大学に赴任して間もない一九五三年(二十九歳の)頃、決定的な影響を受けることになるデイヴィッド・リースマンの『孤独な群衆』(一九五〇年)¹⁶に出会い、「文字どおり、心を奪われた」のである。

一般には社会学の業績とみなされることの多い『孤独な群衆』だが、永井はそれを政治学の「ひとつの完成された形」だと公言してはばからなかった¹⁷。なぜであろうか。この点についても、永井は『政治意識の研究』に収録された諸論文において回答を明示している。

第一に、「政治意識の研究」という一見平凡なタイトルに実は強いメッセージが込められているように思われる。一九五五年に発表した最初の論文である「政治を動かすもの」の冒頭に記されているように、永井の政治学の出発点は、二十世紀の政治の新しい認識にあった。十九世紀においては、政治的領域は小さいほどよいものとされ、それと非政治的領域との間には明確な区別があった。これに対して、二十世紀においては、二つの領域は、急速に、そして相互に、滲透を深めているという認識である¹⁸。

資本主義の発展は各生活領域に錯綜した利害の分化をもたらし、テクノロジーの発達は大衆を一挙に把握しうる装置の利用を可能にした。その結果、政治は、一方において権力の滲透性と機動性の増大によって特徴づけられるようになり、他方で「人間心理の外殻をやぶって滲透する権力は、逆にその深層にひそむ潜在的エネルギーを政治の世界へと解放する」。こうして「権力と心理は相互に媒介しあい、権力の安定は心理の安定に依存し、心理の安定もまた権力の安定を前提とする」ようになった。

政治学は、制度や機構の静態分析にとどまらず、政治過程における集団・世論・宣伝・政治意識・リーダーシップ等の動態分析を主要課題にしていたのだと永井はまず指摘する。そして、注目すべきことに、『政治意識の研究』の「総まとめ」に当たる一九六〇年の論文においては、次のように言明している。

現代のマス社会では、象徴の配分というものは集団からさらに個人に移行している。たとえば、政治とは何か、権威とは何か——という表象は、その極限を考えれば、個人の数ほどイメージが違うといっている。ここから、現代の政治学は、不可避的に、まず、政治意識論として成立せざるをえないのであって、微視的には、それぞれの個人が、外界をいかに表象し、その現実像に対して、いかなる態度をもつか、そのイメージと参照基準、態度、動機づけ等の内面的関係に着目し、その行動と表象の織りなす複合体として全体像を再構成していく以外にない。¹⁹

カール・マンハイムの知識社会学を大衆社会向けにさらに徹底させたといってもよいこの「イメージをイメージする方法」²⁰は、まさにデイヴィッド・リースマンが『孤独な群衆』で採用し、みごとに展開した「現実」分析のアプローチであった。一見、手工業的ともいえるインタヴューという手法をもとに新中間層が政治に対してもつイメージを探り、ヴェーバー的な理念型の活用（この場合は「伝統指向型」「内部指向型」「他者指向型」）によってその全体を明確化しながら「現実」に近づく。そうした迂回的アプローチによる「政治意識の研究」に永井は、政治学の未来の「極限」を見ていたのである。

『孤独な群衆』に永井が「完成された形」を見た第二の理由、それは前節で概観した状況規定の問題に深く関連して

いる。政治理論上の言葉の多くが「認識象徴」であると同時に「組織象徴」にならざるをえないのだとすれば、その検証基準は「真偽 (truth)」のみではなく、「もっともらしさ」(plausibility)——つまり、説得力と実効性」になるだろうと永井はいう。²¹ それでは、それは誰に対する、何に向けての「説得力と実効性」なのか。

この問題を鋭く分析したのが、一九五九年に発表した「大衆社会における権力構造——D・リースマンとC・W・ミルズの権力像の対立をめぐって」であった。「孤独な群衆」において「アメリカを支配する者は誰か」という挑戦的な問題を提起したリースマンは、「かつての支配階級による権力ヒエラルヒーが拒否権行使集団の権力拡散に移行している」と主張した。これに対して、それを幻想だとし、「重大な政策決定が民衆の手に及ばない経済・軍事・政府高官の少数グループの手に独占される高度の権力集中社会に移っている」という認識を突きつけたのがミルズの『パワー・エリート』(一九五六年)である。²² 日本の学界や言論界においては、ミルズのリースマン批判に賛意を示す者が多かった。そうしたなかで永井はこの二人の議論を吟味し、まず両者の事実認識が実は類似していることを指摘する。そして次に、彼らの問題意識が違うことを強調し、まさに「説得力と実効性」の観点からリースマンの分析に軍配をあげたのである。

ミルズのいわんとする点は、「パワー・エリートが史上空前の権力を掌握し、歴史形成の主体になっているにもかかわらず、『組織化された無責任』によって、かれら自身の権力と責任を自覚していないという点」にある。これに対してリースマンは、新たに台頭してきた新中間層の政治的成熟と政治的参加を阻み、そのリーダーシップの確立を妨げているものは一体何かと問うている。そしてその答えを、新中間層が政府に文句をつけて、すべてを拒否し、自己の個別利益を守ることに腐心する集団と化して、統治という公的責任を自ら担っていく能力と情熱を失っている点に求

めている。

こう指摘する永井は、リースマンが「現代アメリカで『リーダーが権力を失っているのにフォロワーは権力を手に入っていない』内在的な理由（人間の実践的行動によって管理可能な要因）（傍点は引用者）を追究していることを高く評価する。ミルズの「構造的権力論」は、「他者へ向けられた知識」、（そしてその意図せざる結果としての）「権力者へのアップール」であり、まぎれもない「事実」「真実」を通信しているにもかかわらず、しばしば「荒野でひとり叫ぶに似た空しさ」とペシミズム」に陥る。これに対して、リースマンの「状況的権力論」は、「統制権力」（拒否権力）はもつのに「統合権力」をもてずに無力感に陥る「自己」に向けられた激励のメッセージ、すなわち自己を含む中間層を自律的な指導階級へと成熟させていくための「現代大衆社会における『君主論』」にほかならない。²³

あたかも女性解放の最大の敵が、しばしば女性自身であるように、現代の大衆社会における「無力なる少数者」を、孤立させ、無力化しているものも、じつはかれら自身の、知られざる圧力なのである。かれらの日常行動を知らず識らずのうちに一定の方向に流し込む圧力、アメリカの文化全体に重くたちこめる気圧配置こそ、当面の分析対象とならざるをえない。その圧力から自らを解放し、政治の全体を通覧することのできる《主体的浮動層》（政治の主体）として再形成していくための「自己認識」と「自己装備」の学がリースマンの政治学であった。²⁴

こうして永井は、リースマンのうちに、政治的行為者の自律的政治参加を促そうとする、マキャヴェリからヴェーバー、マンハイムに連なる「ヨーロッパ的社会科学の伝統」が脈打っているのを感じずにはいられない。そして、永

井はこの伝統を後に「実践的思惟の系譜」と呼ぶことになるのである。

自身の「実践的思惟」を完成させつつあった一九六一年十月、永井は来日していたリースマンと直接対面する機会を得る。²⁵そして翌年の九月、リースマンが教鞭をとるハーヴァード大学に留学するのである。

(注)

¹⁵ 前掲「二十世紀と共に生きよう」、一九〇二〇ページ。

¹⁶ David Riesman in collaboration with Reuel Denney and Nathan Glazer, *The Lonely Crowd: A Study of the Changing American Character* (New Haven, CT: Yale University Press, 1950). 邦訳、加藤秀俊訳『孤独な群衆』上・下(みすず書房、二〇一三年)。

¹⁷ 前掲「二十世紀と共に生きよう」、二七七ページ。

¹⁸ 「政治を動かすもの」、前掲『政治意識の研究』、所収、一〇二ページ、参照。

¹⁹ 前掲『政治学の基礎概念』、三三三―三三ページ。

²⁰ 「イリュージョンについてイリュージョンをもつことは、あたかもマイナスかけるマイナスがプラスになるように、真理について真理を発見するプロセスと同じである」というケネス・ボールドディングの著書『イメージ』からの文章を永井はよく引用した。永井のマンハイムのアプローチの力点は、「思惟の存在被拘束性」(イデオロギー性)の暴露よりも、まさに「イメージをイメージすることにあるように思われる。この点が、同じマンハイム的アプローチの採用者であり、現代の「リアリズム」の創始者ともいわれるE・H・カーとの違いのひとつであろう。なお、カーの「過度に単純化された」知識社会学的アプローチについては、Michael Joseph Smith, *Realist Thought from Weber to Kissinger* (Baton Rouge, LA: Louisiana State University Press, 1986), Chapter 4. 邦訳、押村高ほか訳『現実主義の国際政治思想——M・ウェーバーからH・キッシンジャーまで』(垣内出版、一九九七年)、第四章、参照。

²¹ 前掲「認識の象徴と組織化の象徴」、一一一ページ、参照。

²² C. Wright Mills, *The Power Elite* (New York: Oxford University Press, 1956). 邦訳、鶴飼信成・綿貫謙治訳『パワー・エリート』上・下(東京大学出版会、一九五八年)。

²³ 以上の議論については、「大衆社会における権力構造——D・リースマンとC・W・ミルズの権力像の対立をめぐる」、前掲『政治意識の研究』、所収、二九五～三二二ページ、および、前掲「二十世紀と共に生きて」、三八～四〇ページ、参照。

²⁴ 前掲「大衆社会における権力構造」、三一七ページ。

²⁵ この出合いの経緯については、中本義彦「運命的な出合い——デイヴィッド・リースマンから永井へ」『国際交流』一〇〇号（二〇〇三年七月）、七〇～七六ページ、参照。

三、国際政治への応用

以上のように見ると、永井が国際政治の研究に情熱を傾けるようになった理由も容易に推測できよう。理由は、単に一九六二年十月にアメリカで「熱核戦争の深淵を垣間見た」という恐怖の体験だけではない。永井は、「日本にいると、想像もつかぬ力のせめぎあいの現場」にいた。リースマンや多くの研究者と同じ場所にいたが、にもかかわらず、彼らとは異なり、キューバ危機という大事件を的確に意味づけることができなかった。そういう「自分の無知を恥じた」のであり、「国連事務総長の献身的努力と、平和を愛する諸国民の力で、キューバ危機は回避された」という日本から来る新聞や雑誌の脳天気な論調に危機意識を強めた。²⁶

もちろん、国際政治の「現実」を的確に認識することが容易ではないことは、永井も重々承知していた。交通と通信の拡大により直接的な接触による世界を超えて生活せざるを得なくなった現代人は、国内社会においてさえ、新聞、テレビ、ラジオ、雑誌等の伝える情報でつくられた「一種の象徴的環境」に生き、その不完全な情報をもとに判断し行動せざるをえない。ましてや国際政治は、はるかに広く不確実な世界である。「行き当たりばったりの、デタラメの

行動をやるか、自分の実感の世界に閉じこもってしまうか、あるいは、疑似的知識か、イデオロギーや偏見とよばれるべきあいまいの固定観念にあてはめて、全体のイメージをつくって、なんとかやるほかない」とさえ永井は語っている。²⁷しかし、それにしても、自身も他の日本人も、国際政治に対するイメージがあまりにも貧困だと永井は痛感したのである。

こうして永井は、国際政治の全体像を描こうとし始める。そして、一年半の留学生活を経て一九六四年三月に北海道大学に戻った頃には、「その大体の骨子は、ほぼ出来上がっていた」。だが、進歩派である「東大学派」の一人として、「平和と理想、反戦と反米」を説かない「ひとをおどろかす」論者を発表することを四十歳の永井はためらった。その永井に執筆を強く要請したのが『中央公論』編集部の粕谷一希であり、それを受けて永井は後に『平和の代償』に収録されることになる三本の論文を、すなわち、「米国の戦争観と毛沢東の挑戦」（一九六五年）、「日本外交における拘束と選択」（六六年）、「国家目標としての安全と独立」（六六年）を立て続けに発表した。六一年に書いた「イデオロギーと組織象徴」以来、実に四年ぶりに本格的な論文を上梓しはじめたのである。²⁸

周知のように、これらの論文によって永井は、「国際政治学者」と目されるようになった。そして、すでに「現実主義者の平和論」（一九六三年）や「海洋国家日本の構想」（六四年）を世に問うていた高坂正堯とともに日本の「現実主義」の旗手となった。しかし当然ともいえるが、三十八歳まで政治意識を研究していた、永井の国際政治へのアプローチは、リアリズム流というよりもむしろリースマン流であった。『平和の代償』の巻末に示されているように、彼の第一の参考文献は『政治意識の研究』とそのエッセンスを凝縮して説明した編著の『現代政治学入門』であり、第二は、リースマンと類似したアプローチを持つ国際政治学者で同じくハーヴァード大学で教鞭をとっていたスタンレー・ホ

フマンの著書だった。

それでは、リースマン流の国際政治学とは、どのようなものだったのだろうか。

a. イメージから「制度」へ

その特徴がもつとも明確に示されているのは、やはり最初に書かれた「米国の戦争観と毛沢東の挑戦」であるといつてよからう。この論文で永井は、第一に、「イメージをイメージする」ことに力を注いでいる。リースマンが『孤独な群衆』で試みたのは、アメリカ社会に暮らす新中間層の人びとの自己イメージ、とくに彼らが何に、対して、同調するかというイメージの把握だった。社会はその発展段階の〈プロセス〉に応じた一定の「同調様式」を人びとに要求する。伝統的社会は、伝統に従うことを求めるし、近代の生産社会は富や名誉など幼少期に年長者から自己の内部に植えつけられた目標に集中することを促す。そして現代の大衆消費社会は、仲間や世論などの他者に同調することを要求する。ところが、そこに生きる人びとは多様であり、さまざまな〈ドラマ〉を繰り広げる。こうして生じる社会構造の要求とそこに生きる人びとの性格構造のズレを浮き彫りにして、社会が安定的・創造的に機能する条件をリースマンは探ろうとした。

国際政治を素描するうえで永井が最初に行なったのも、主体が政治的に行動するうえでカギとなる動機づけのイメージ、つまり、「平和の達成」という目標を獲得する手段や方法についてのイメージの把握であった。永井は、その源泉を主として国内に求める。すなわち、「国際関係における力とモラルの役割についてのイメージは、その国民の多年にわたる社会生活、国内の政治的経験の投射（プロジェクトション）である」と考える。そして、現在の世界には次のよ

うな「三つの基本的に異なった国際秩序観」が並存しており、そこに「平和の困難性」があると指摘したのである。

一、調和ある市民的法秩序を、国際関係へ直接投射したアメリカ的な「法律万能の道義主義的アプローチ」〔機構型〕

二、紛争の限定化、経験的な試行錯誤の積み重ねでルールを作り、秩序を動的に維持することを目指す、ヨーロッパ的な「力の均衡」による国際秩序維持〔制度型〕

三、反帝国主義、反植民地の民族解放闘争の極限、つまり動乱において、はじめて「平和」が達成されると考える現状打破(革命)勢力のもつ国際政治観〔状況型〕²⁹⁾

ここで重要なのは、「状況」「制度」「組織(あるいは機構)」という永井が構築した政治学の中核をなす概念を、彼がこれらのイメージに重ねて、きわめて効果的に使用していることであろう。永井によれば、人間は「自己保存の本能」と人間特有の「予見能力」をもつがゆえに権力を渴望して「潜在的な戦闘状態」に陥る存在である。そして、その状態に永く耐えることができず「秩序と安定」を求める存在であるがゆえに「政治」を必要とする。その発現形態が「状況・制度・組織の三つのレベル」にほかならない。³⁰⁾そこでは、秩序安定のカギは、「制度」にある。われわれは「制度」なくして混沌とした「状況」を抜け出すことはできないし、「組織」も「制度」の基盤があつて初めて安定的に機能する。「政党」「圧力団体」「官僚制」「軍隊」といった人為的かつ明示的に作られるフォーマルな「組織」は、試行錯誤のなかで自然発生的かつ暗黙裡に生成されたインフォーマルな「制度」(伝統、規律、モラル、慣習)に支えられてこそ

政治的秩序の形成に資する。

これが永井の確信であり、彼が起点にした二十世紀の政治の「新しさ」も、実のところ、この「制度」の融解にはかならなかつた。十九世紀のイギリスに典型的に見られた政治の安定条件（エリート集団の同質性、統治機能と代表機能の均衡、ミドル・クラスによるフィードバック機構、政治過程から隔絶されていた大衆の無知など）は、テクノロジーの発達、マス・デモクラシーの進行と、それらがもたらした資本・人口・知識の劇的な増加によって消滅していった。³¹とくにマス・コミの異常な発達にもなう象徴や言語へのアパシーと軽蔑は、個々人を結びつける秩序感覚を喪失させ、群衆を孤独な個人状況へと分化させている。そして、そうした「状況化」を食い止めるべく、いたるところで「組織化」（管理組織の強化）が進んでいる。

このようななかで、現代の大衆消費社会を政治的にうまく機能させる「制度」を、われわれは、どのようにして再建すればよいのか。われわれを取り巻く状況を、どのように規定すればよいのか。これがリースマンの衣鉢を継いだ、永井の「政治意識の研究」における一貫した問題意識であつた。

興味深いことに、永井は国際政治の研究においても、国内政治と同種の問題を見出している。すなわち、国際社会が長期にわたる試行錯誤のなかで作上げた「制度」である勢力均衡の融解である。テクノロジーの発達による戦争犠牲者の劇的な増加、マス・デモクラシーの吐き出す民族主義や民主主義といったイデオロギーによる戦争の情緒化、これらによって、戦争は無限定なものになってしまった。ちょうどインフォーマルな「制度」の融解が国内政治の「状況化」と「組織化」をもたらすように、国際政治においても「制度」の融解は赤裸々な暴力による「状況化」と普遍主義的・形式的な「機構」的思考を蔓延させ、国際社会から可測性を奪っている。永井は、こう現状を認識したので

あり、この認識が彼を「リアリズム」へと近づけたのである。³²

それでは、われわれは、どのように状況を規定し、自身を「制度」の再建へと向かわせればよいのか。ヴェトナム戦争が激化するなかで、「米中間のイメージの修正と、ルールの確定に少しでも、寄与する」には、どうすればよいか。永井は三段構えで議論を展開している。すなわち、第一に、国際問題に対するアメリカのアプローチが冷戦の開始と激化をもたらした「機構型」から「制度型」に変化して、ソ連との間に「制度」が生成されつつあることを指摘し、第二に、そのアメリカの「制度型」アプローチに中国の「状況型」アプローチが真っ向から挑戦して、事態が危機的になりかねないことを示し、第三に、それにもかかわらず、いわば「機構信仰」に陥っている、日本人に対して「制度型」のイメージに移行するように促している。

そのアプローチは、ここでもリースマン流である。第一に、永井は三つのイメージを理念的に使用している。それらは、米欧中がもつ国際秩序観を帰納的に分析し、それがある程度まで純粹化して得られたものであり、三者の秩序観の本質的な相違を示している。そして同時に、それらは変化を示すための道具でもある。調和ある市民的法秩序を国際関係へ直接投射した「法律万能の道義主義的アプローチ」、平和と戦争の明確な区別、外交と力の分離、最も効率よく完全に敵を破壊することを目指す「工学的戦争観」。アメリカのもつこうした「機構型」のイメージが漸次「制度型」へと移行しつつあることを示す、いわば測定基準として用いられている。

第二に、その移行を迫ったのは、ほかならぬテクノロジの発達という歴史上の〈プロセス〉であり、異なるイメージをもつ国との衝突の〈ドラマ〉であることが示されている。アメリカはソ連の「状況型」の行動に直面して冷戦を開始し、「工学的戦争観」の体現である「大量報復政策」を掲げた。しかし、(一)朝鮮戦争の勃発によってそれが限定

戦争を抑止しないものであることを学び、(二) 東欧諸国の一連の暴動に直面してソ連の勢力圏を尊重せざるをえないことを悟り、(三) キューバ危機を通して「つねに敵との通信路をあけておいて、限定された政治目標と意図を相手方へ強要する」重要性を理解した。こうしてアメリカは伝統的に抱えてきた「機構型」の戦争観・平和観から離れるようになったのであり、当初は「状況型」のイメージを抱いていたソ連も、やはり「制度型」へと転じた。国際社会は、強い自己抑制力をもつようになったのであり、政治体制の根本的相違や厳しいイデオロギー対立といった革命的な様相を呈しながらも、結果的に歴史上最も安定性の高かった「多角的な力の均衡体系」に類似してきた。このような変化を明確に記述するための知的道具として、「イメージ」が効果的に使われている。

第三に、永井は「イメージ」を使用しながら、自己を含む日本人に、広く国際秩序について自律的に考えるよう「激励のメッセージ」を送っている。まず、アメリカの「制度型」への移行を示し、それに対して「状況型」の中国が挑戦しているという世界の構図を示す。

中国は、反帝国主義・反植民地の民族解放闘争の極限において初めて「平和」が達成されると考えており、その戦略思想は、戦争と平和の同一視、「政治」による力と外交の統合、自国民の人命尊重という前提の否定など、アメリカの伝統的戦争観とすべての点で対極をなしている。

その中国とアメリカが激突しているのがヴェトナム戦争であると永井は主張する。それは単なる「弱い者いじめ」ではなく、「通常戦争（限定戦争）へのエスカレーションの圧力で、ゲームのルールを中国に強要し、状況型を少しでも、制度型へひきずりこもうとしている」アメリカと、「すべての点で不利な状況下の米国を、ゲリラ戦のルールにしばりつけ、『ハリコの虎』を世界のさらしものにする作戦」の中国との間の激突である。

こうして永井は、全く異なる国際秩序観をもつ米中間の緊張が高まっている意味を日本人に提示し、日本もこの緊張と無関係ではいられないがゆえに「軍事問題をせまい軍官僚や制服組の少数の軍事専門家の手から解放」しなければならぬと訴える。そして注目すべきことに、日本人の国際秩序観に一種の「機構信仰」を見出し、これを克服する必要性を強調している。

「第七艦隊の楯にかくれ、ノンビリと平和を享受し、一種の孤立主義のムードに閉塞している」日本、「熱核戦争の時代には、通常兵力は役に立たないという時代遅れの神話をいまだに信じている」知識人、「すべての紛争や問題を、法的な機構(たとえば、国連)に訴えて、解決できるという」素朴で誤った信念をもつ人びと。こうしたムードを支えているのは、無葛藤な「アメリカン・リベリズムの理想主義が最もラディカルな形で結晶化した」憲法九条であると永井は見ている。

われわれは、アメリカン・リベリズムが国際政治の荒波に巻き込まれたとき、どのような反応を示したかを肝に銘じなければならぬ。冷戦を開始し、不必要に激化させたアメリカの「他人の経験」から学ばなければならない。³³「戦争アレルギー症」から脱して「明治期の指導者もっていたあの生き生きとしたパワー・ポリティクス感覚をもう一度、学習」しなければならぬ。少なくとも、「自らの力で、周囲の善意ある第三者に対して、最小限度の安全感を与えるだけの政治的安定性と抵抗力を培養」し、「現状維持国としての日本の利益に立った外交政策」を確立しなければならぬ。永井は、こう訴えたのである。

b. 「拘束と選択」の研究

「米国の戦争観と毛沢東の挑戦」がリースマン流のアプローチをとっているのだとすれば、次の論文「日本外交における拘束と選択」は、そのタイトルからもわかるように、ホフマン流の分析であるといつてよからう。ただし、永井自身は、両者の方法を、ある意味で「非常によく似ている」ものとしてとらえていた。この点は少なからず重要であろう。

なるほどリースマンが、ジークムント・フロイトに発し、エーリッヒ・フロムらが発展させた「フロイト左派」の流れをくんでいたのに対して、ホフマンは「フランスにおけるマックス・ヴェーバーの後継者」ともいわれたレイモン・アロンの衣鉢を継いでいる。ホフマンが第一に「理解」しようとしたのは、恐怖、野心、憎悪といった普遍的感情ではなく、個々人が意図する（あるいは行為を正当化するように思われる）動機であり、そこから見えてくる「歴史現象の独自性」であった。³⁴

しかしながら、リースマンも、実際には、動機のイメージの理解を試みていた。彼が目指したのも「生物学的な普遍主義」よりも「ひろい歴史的な問題をあつかうこと」であり、「普遍的な次元」よりも「アメリカ社会のなかでの特殊な歴史的発展」という「歴史的な次元」の分析であった。³⁵そして、ホフマンも他方では後に国際政治心理学会の会長を務め、その就任演説で「政治はすべて心理学的である」とも述べている。³⁶政治的行為者のもつ「イメージをイメージ」し、そこから全体像を素描しようとする点において、そしてその全体像が実践的意味をもつことを自覚している点において、少なくとも両者は一致している。そう永井には見えたのではなからうか。

こうして「拘束と選択」の分析は、リースマン流の「実践的思惟」の実践性をさらに高めたものとも理解されよう。

「イメージ」を分析して「激励のメッセージ」を送るだけでは戦略的行動は生まれにくい。少なくとも政治的行為者たちの意図する個別の動機を理解し、そのうえで彼らに「できない範囲」と「できる範囲」とを示してやらなければならない。約二十年後に上梓する『現代と戦略』の文献案内で永井は「ハリねずみと狐」をとりあげ、

本書においてイギリスの碩学(政治思想家)サー・アイザ・バーリンは、トルストイの歴史哲学を解剖することによって、マキャベリーから、マックス・ウェーバーにいたる実践的な思惟の本質——つまり歴史における拘束と選択という根本問題に迫っている。³⁷

と述べることになるが、まさにそれこそアロンが『諸国間の平和と戦争』(一九六二年)において国際関係理論の目的として設定したものであり、ホフマンが同じ年(永井がハーヴァード大学に滞在した年でもある)に「アメリカ外交政策における拘束と選択」で応えようとした問題であった。³⁸ 永井の「日本外交における拘束と選択」(六六年)は、その延長線上に生み出されたのである。

容易に理解できるように、このアプローチは、控えめであると同時に野心的でもある。一方で、それは政策提言というよりもむしろ「効果的な選択の領域の画定」にとどまる。ホフマンが述べているように、その関心は「政策よりも、国際関係の主要な特徴に関する一連の問い、つまり国際関係の決定要因と論理を理解しようとする体系的な努力という、かなり広義で控えめな意味の理論に向かっている」。³⁹ しかし他方で第一に、バーリンも述べているように、このアプローチは、トルストイの『戦争と平和』をはじめとする文学や哲学でも取り上げられてきた人間の根本問題に

関わっている。第二に、国際システムのレベルと国家のレベルを分けて分析しようとする多くの理論とは異なり、それを架橋した全体像を示そうと試みる。それはクロード・モネの睡蓮の絵のようにおぼろげなものかもしれないが、にもかかわらず、「無為の蓄積」や「全能の幻想」を擁護する明快な議論に対して鉄槌を加えることができる。そして第三に、個々バラバラの事件に意味を与えて状況を規定する「公共哲学」を供給できるのである。⁴⁰

それでは、永井が示した日本外交における「効果的な選択の領域」とは、どのようなものだったのか。第一に、永井は、恩師の丸山眞男を含む当時の多くの知識人が説いていた日本の中立という目標を少なくとも短中期的には「できないこと」として退ける。ホフマンは、戦後のアメリカが二極システムのひとつを担うことになったのは「選択によるものではない」と記しているが、それと同じように永井は、「日本は、敗戦後、選択によってではなく、運命によって、米ソ対立のなかに、編みこまれたのである」と直截的に述べる。

そしてさらに、「第一に、米、国、第二にソ連、第三に中国が、日本にとって脅威である」(傍点は引用者)と率直に指摘する。「アジアにおいてアメリカはハリコの虎である」とか「アメリカは軍事的・政治的にアジアに深くコミットしすぎているから後退せざるをえない」とか「中共が経済的・政治的・軍事的に日本などとは比較にならない、高い威信と勢力をもったパワーとして出現する」いった中立論者が抱きがちな議論を、永井は「少々あやしい」と見る。⁴¹もし日本が中立すれば、アメリカの目には「共産圏に一步近づいた」と映ることになり、決して中立にはならない。つまり最悪の場合、日本はアメリカに包囲されることになるのであり、「これを妄想と笑う人は、米帝国主義などと、口先だけで、心の底から米国に依存し、安心しきっているお人好しであることを自ら暴露している」と永井は鋭く批判する。

第二に、永井は「モスクワ―東京―ワシントン枢軸」を提唱している。これはもちろん、先の論文「米国の戦争観と毛沢東の挑戦」における分析の帰結でもある。すなわち、米ソ両国は「制度」を形成し始めており、これに「状況型」の国際秩序観をもつ毛沢東の中国が挑戦しているという分析である。

もし「その優先順位〔潜在的脅威の順番〕にしたがって、外交による友好関係を持続し、なんらかの相互の安全保障体制の確立によって、相手方を無害化する外交路線が、国防費を削減し、日本に、行動選択の大きな幅をゆるす道なのである」とすれば、日本はまず米ソ間の「制度」の形成を側面から支援しなければならない。そして、米ソとともに、「状況型」のイメージをもつ中国を「制度」に引き込まなければならない。すなわち、「中国が、他の諸国と平和的に共存しうる体制に変化していく経済―政治的傾向を助長」しなければならない。

こうして、永井は、日本外交の中期目標を「中国との国交回復と、正常な外交関係の確立」に置き、その目標達成の戦略として「迂回的、間接的アプローチ」を唱える。日ソよりも日中の国交回復を叫ぶ声が圧倒的に大きかった当時であって、まずは「領土問題など、タナ上げしても、ソ連との平和条約締結に前進しなければならない」と訴えたのである。⁴²

(注)

²⁶ 永井陽之助『平和の代償』(中公叢書、一九六七年)、二二九―二二二ページ。なお、本書は、櫻田淳氏のすぐれた解説『『平和の代償』再読―永井陽之助の遺産』を巻頭に付して、中公クラシックスの一冊として二〇一二年に再刊されている。

²⁷ 前掲「哲学の再建」、九二ページ。

²⁸ 永井陽之助「『平和の代償』を書いた頃」『中央公論』一九八五年二月号、五五〜五六ページ、および、筆者も参加したインタヴュー、永井陽之助「『平和の代償』から四半世紀」『歴史と未来』第一七号（一九九一年）、六ページ、参照。

²⁹ 「米国の戦争観と毛沢東の挑戦」、前掲「平和の代償」、所収、五〜六ページ。後述するように、永井が国際関係を分析するうえで、「その国民の多年にわたる社会生活、国内の政治的経験」を研究する必要性を強調したことは重要である。これについては、永井自身も、母校の安積高等学校創立百周年記念講演で、先達の朝河貫一に言及しながら次のように述べている。「朝河先生の国際関係の見方というものは、歴史というのは単なる国との関係ではなくて、その国の国民性、歴史、文化に深く根をおろしたもので、そういうものを研究しないと本当に国際関係というものはわからないということを夙に強調されたのです。私もその観点から自分の研究を進めようと思ったのです。」前掲「二十世紀と共に生きて——安積時代の思い出」、三三ページ。朝河貫一については、例えば、阿部善雄「最後の『日本人』——朝河貫一の生涯」『岩波現代文庫、二〇〇四年』、参照。

³⁰ 「状況・制度・組織」をめぐる永井の考えは、概略、次のようになる。第一に、人間は生きるために「福祉価値」（生活の糧）と「名誉価値」（生きがい）を求め、その「課題意識と関心でみられた環境の意味的側面」たる「状況」下に置かれる。第二に、その混沌とした「状況」のなかで価値追求の試行錯誤を繰り返して、その反復から「社会で正統と承認される目標価値獲得の行動定型」たる「制度」にたどり着く。そして第三に、そうした「制度」のうえに「より作動的・合目的で、もっぱら生産効率や管理効率の観点から、機械合理的に成員個人の役割を定型化」した「組織」を構築する。篠原一・永井陽之助編『現代政治学入門』第二版（有斐閣双書、一九八四年）、七〜一三ページ、参照。なお、永井は「制度」の概念を、岡義達「マス・デモクラシーと政治集団」、『岩波講座 現代思想』第六卷（岩波書店、一九五七年）、所収から借りている（筆者の知る限り、丸山眞男がこうした「制度」の概念を明示したことはない）。前掲「政治的認識の構造」、三五〇ページ、参照。

この「制度」とロバート・コヘインらの「ネオリベラル・インスティテュショナルリスト」が一九八〇年代末から使用している「制度」（institutions）は違う概念であることに留意すべきである。コヘインの場合は、「リアリスト・モデル」に対するアンチ・テーゼとして「制度」を使用している。すなわち、「なぜアナキー下でも協力は可能か」という問題を提起し、その媒介変数として「制度」の存在を指摘している。よって、フォーマルな政府間組織と非政府組織、国際レジーム、慣習の三要素を含むものとして「制度」を定義している。Robert O. Keohane, "Neoliberal Institutionalism: A Perspective on World Politics," in Keohane, *International Institutions and State Power: Essays in International Relations Theory* (Boulder, CO: Westview Press, 1989), pp. 3-4. これに対して、永井の場合は、人間の必要に根拠した秩序の形成と安定に焦点を当て、「組織」の基盤として「制度」を使用している。よってそれは、フォーマルな組織を含まない。

31 前掲「マス・デモクラシーと大衆運動」、一六〇―一八二ページ。

32 勢力均衡という「制度」の融解については、永井が後に発表した「アジアにおける『力の均衡』」、「多極世界の構造」(中公叢書、一九七三年)、所収、六三―八一ページ、「冷戦の起源——戦後アジアの国際環境」(中央公論社、一九七八年)一一―一六ページ、なども参照。

33 「米国の戦争観と毛沢東の挑戦」は、ほぼ同時期に脱稿された「なぜアメリカに社会主義はあるか」(日本政治学会年報「西欧世界と社会主義」岩波書店、一九六六年)と「対になって読まれるべき」だと酒井哲哉は指摘している。つまり、「両論文はいずれも体制護教として制度化された米国内ベラリズムの硬直性を批判したものであり、体制の目標価値の変革を試みるラディカル知識人と、機構型の秩序観を国際政治に投射することで生まれる過剰なモラリズムを批判する保守リアリズムの視点の双方から、制度化された米国内ベラリズムを挾撃する意図を持っているのである」と述べている。前掲「永井陽之助と戦後政治学」、七八―七九ページ。

その続編として書かれた、酒井哲哉「未完の新左翼政治学——丸山眞男と永井陽之助」『現代思想』第四二巻、第一一〇号(二〇一四年八月臨時増刊号)も参照。永井を「新左翼」と呼ぶのが適切かどうかはともかく、彼が「日本外交における拘束と選択」において「民主的社会主义社会」の構築を目標として掲げていることは事実であり、これについて質問した筆者に対して永井は「いまでいう『社会民主主義』のことだ」と答えたことがあった。いわゆる「社会民主主義者」が日本の防衛論において果たした役割については、佐道明広『自衛隊史論——政・官・軍・民の六〇年』(吉川弘文館、二〇一五年)、七四―八〇ページの指摘もあり、これもあわせて考える必要がある。

なお、アメリカン・リベラリズムの「硬直性」を批判した著作として「対になって読まれるべき」ものを、もうひとつあげるとすれば、『冷戦の起源』であろう。「なぜアメリカに社会主義はあるか」において、永井は、アメリカが社会主義を自己体制の内的変革を喚起する「挑戦」としてではなく「脅威」としてしか捉えられなかった原因を分析し、リアリストたちもそのイデオロギー性から完全に自由ではないことを指摘している。そして『冷戦の起源』においては、ケナンが提唱した「封じ込め」政策についても、それが軍事的な封じ込めよりも政治的な封じ込めを強調している点を高く評価しながらも、彼が使う「疫学的メタファー」に共産主義を「風土病」ではなく「伝染病」と見るイデオロギー性が潜んでいると論じているからである。中本義彦「現実主義者のアメリカ——高坂正堯・永井陽之助の思考と論理」『中央公論』二〇一一年十月号、参照。

永井自身は、すでに活字にしていたアメリカ論に二本程度の書き下ろしを加え、文章を「やわらかく」して一九九二年一〇月頃に著書として東京大学出版会から上梓する計画を立てていたが、筆が進まず、結局、実現しなかった。表題としては、『アメリカ・イデオロギー——現代政治と知識人』『二十世紀とアメリカ』『分裂するアメリカ』などを考えていたようであり、目次としては、「序説 米国のリズ

ム(書き下ろし)、「I なぜアメリカに社会主義はあるか」(一九六六年)、「III 鯨の象徴学」(七五年)、「IV 脱工業化イデオロギーの終焉」(八七年)、「V、ポスト・レーガンの米国防略」(書き下ろし)があげられている。永井が書いた企画案を見せていただいた、元編集担当者の竹中英俊氏に厚く御礼申し上げます。

³⁴ Raymond Aron, *Introduction to the Philosophy of History* (Boston: Beacon Press, 1961 [1958]), pp. 103-111. 邦訳、霧生和夫訳「歴史哲学入門」荒地出版社、一九七一年)、「二七〇―三三三ページ、参照。この点については、ナショナリズムの二つの類型をルサンチマンによって説明しようとした Liah Greenfeld, *Nationalism: Five Roads to Modernity* (Cambridge, MA: Harvard University Press, 1992) に対するホンマンの批判「The Passion of Modernity,” in Stanley Hoffmann, *World Disorders: Troubled Peace in the Post-Cold War Era* (Lanham, MD: Rowman and Littlefield, 1998), pp. 189-200 なども参照。

³⁵ “Preface to the 1961 Edition,” in *The Lonely Crowd* (New Haven, CT: Yale University Press, 2001), p. xxxvii. 邦訳、加藤秀俊訳「孤独な群衆(上)」(みすず書房、二〇一三年)「一二ページ」。

³⁶ Stanley Hoffmann, “On the Political Psychology of Peace and War: A Critique and an Agenda,” in *Janus and Minerva: Essays in the Theory and Practice of International Politics* (Boulder, CO: Westview, 1987), p. 418.

³⁷ 『現代と戦略』(文藝春秋、一九八五年)「三六一ページ」。永井はバーリンを高く評価していたが、E・H・カーについては「さほど言及しなかった。すでに見たように、永井もカーと同様に、マンハイムから大きな影響を受けていた。しかし、『ハリねずみと狐』(中央公論社、一九七三年)の「訳者あとがき」で河合秀和が詳しく紹介している「カー||バーリン論争」については、後者に軍配をあげていたと思われる。つまり、永井は、歴史における「個人の責任」や「実現されなかった可能性」を問うことを「死んだ馬に鞭を振って、生きていくかのように見せかける」ことだと批判するカーには共感していなかったのではないか。ジョナサン・ハスラムは、カーの「進歩」に対する信念が「個人に対する道徳的判断の拒否」という彼の歴史(そして人生)に対するアプローチと結びついていたことを指摘しているが、永井もこれと類似した見方をしていたのではないかと思われる。Jonathan Haslam, *The Vices of Integrity: E.H. Carr 1892-1982* (New York: Verso, 1999). 邦訳、角田史幸・川口良・中島理暁訳「誠実という悪徳——E・H・カー 一八九二―一九八二(現代思潮新社、二〇〇七年)」。および、その書評、中本義彦「『冷徹さ』の陥穽」『環』第三四卷(二〇〇八年夏)「三〇四―三〇九ページ」参照。

³⁸ アロンは「われわれの知識の限界と歴史的選択の条件の双方を示す」(ことを研究の目的として設定して)る。Raymond Aron, *Peace and War*, p. 4. ホンマンの論文「Restraints and Choices in American Foreign Policy」は、一九六二年の秋に *Duellus* 誌に発表され、Stanley Hoffmann, *The State of War: Essays on the Theory and Practice of International Politics* (New York: Frederick A. Praeger, 1965), pp. 160-197 に収録され

152。

³⁸ Stanley Hoffmann, *Gulliver's Troubles, or the Setting of American Foreign Policy* (New York: McGraw-Hill, 1968), p. xix. なお、この著書は、"Restrains and Choices in American Foreign Policy"を発展させたものである。

⁴⁰ バーリンの問題提起を受けてホフマンは、"The Sound and the Fury: The Social Scientist versus War in History," in *The State of War*, pp. 254-276. 邦訳、中本義彦訳「響きと怒り——歴史における社会学者対戦争」、『スタンレー・ホフマン国際政治論集』所収、四二九〜四五六ページ、を書いている。国際システムのレベルと国内のレベルの架橋については、Hoffmann, "Restrains and Choices in American Foreign Policy," pp. 160-161. 参照。「公共哲学」の定義については、日本国際政治学会創立三〇周年記念の講演録である、永井陽之助「平和の公共哲学を求めて」『中央公論』一九八七年二月号、一六一ページ、参照。そこで永井は、ロバート・ライシュを引きながら、「イデオロギーほど論理的にキッチリと整理され、すべてを包括する体系をもつものではないが、さりとてパブリック・ムードほど、うつろいやすいものでもない。その中間にあって、社会的現実をわれわれが理解するとき、個々バラバラの事件に意味をあたえ、全体を統合するところの基本前提となるようなもの」と述べている。

⁴¹ 永井陽之助・小田実(対談)「一九七〇年代に向かって」『展望』一九六七年四月号、七四ページも参照。

⁴² その結果、永井は、「外務省と人たちは随分対立」することになった。粕谷一希・中本義彦・中山俊宏(鼎談)「追悼 永井陽之助——『平和の代償』の衝撃」『外交フォーラム』二〇〇九年五月号、一九ページの粕谷発言、参照。もちろん、それは「外務省の人たち」が日ソよりも日中の国交正常化を先行させようとしたからであり、挙句の果てに、暗にソ連を標的にした「反覇権条項」入りの日中平和友好条約を結んだからである。これが極東におけるソ連の軍備増強を招き、日本を「新冷戦」の最前線に位置づけることになった。永井陽之助「日中、片面条約の帰結」、永井陽之助「時間の政治学」(中公叢書、一九七九年)、所収、二三八〜二六七ページ、参照。

四、「リアリズム」との対峙

永井の初期の業績とそれが生み出された経緯を概観して気づかされることのひとつは、彼が「現実主義者」と呼ばれていたにもかかわらず、同時代にアメリカで大きな影響力を誇っていた「リアリスト」に、そもそもそれほど言及

していないということであろう。⁴³ もちろん、永井の自伝的叙述のなかに、マキャヴヴェリ、ホップズ、ルソー、ヴェーバーといった「リアリズム」の系譜に連なる思想家を見出すことは容易である。また、永井が一九六八年に編集したアンソロジーの『政治的人間』には、ハンナ・アーレント、カール・シュミット、エリック・ホッフアー、マイケル・オークショットといった、見方によつては「リアリズム」と親和性があるとみなしうる思想家の論考も収録されている。⁴⁴ しかし、「東大の政治学研究室にいた頃」から「ハンス・モーゲンソーなどの国際関係論にも親しんで」いたという永井は、それにもかかわらず、少なくとも一般理論としては、アメリカの「リアリズム」から決定的な影響は受けなかったように思われる。

a. クラシカル・リアリズム

なぜであろうか。坂本義和がすでにシカゴ大学時代の恩師であるモーゲンソーを日本に紹介していたという経緯も無関係ではなからうが、やはりアプローチの違いが大きかったのではなからうか。もちろん、国際政治の全体像を示す必要性を認識している点や、国際機構よりも勢力均衡を国際秩序の安定条件として重視する点、古典的な勢力均衡がナショナリズムの台頭や軍事技術の発達によって成立困難になったと認識している点で永井とモーゲンソーは共通している。しかし、モーゲンソーが権力を「つねに直接目的」とみなして行為者の動機の理解を「無益であると同時に人を誤解させる」ものとみなし、権力という単一の色彩で国際政治の全体像を素描したのに対して、永井は各行為者のもつ多彩な「イメージ」を了解し、それを重ね合わせて全体のイメージを映し出そうとした。⁴⁵ そして、モーゲンソーも理想とした十八・十九世紀ヨーロッパの「古典外交」時代と、二十世紀という「戦争と革命の時代」の違いを、

より鮮やかに描くことを心掛けた。

こうした永井によるモーゲンソーの一般理論に対する潜在的反発は、もうひとりのアメリカの代表的なリアリストであるジョージ・ケナンに対する相対的に高い評価や、(モーゲンソーを含む)アメリカのリアリストたちのアメリカ外交のスタイルに関する分析への依拠を見ても容易に推測されよう。

永井が後の一九七八年に上梓した『冷戦の起源』の主人公は、明らかにケナンであった。永井は、そこで、ケナンが一九四六年の「長文公電」において共産主義を「風土病」よりも「流行病」と断定したことを批判した。「リアリスト」でさえ、共産主義を自己体制の内的変革を喚起する「挑戦」としてではなく「脅威」としてしか捉えられなかったのはなぜか。その理由を考察し、そのひとつを「ピューリタンの『病原菌絶滅主義』というアメリカ伝統の「イデオロギー」に求めた。

しかし他方で、永井はケナンが、多くの場合、相手国の「能力」のみならず、絶えず微妙に変化する「意図」を綿密に分析してその脅威の性格を判定しようとしたことを高く評価した。また、「米国の戦争観と毛沢東の挑戦」においては、「法律万能の道義主義的アプローチ」がアメリカ伝統の外交スタイルだという、ケナンやモーゲンソーらの考えを積極的に取り入れ、それを自身の分析の道具として活用した。

このような永井による「クラシカル・リアリズム」の選択的受容は、いわゆる「操作的方法」(「現実界を構成する諸変数は、バラバラではなく、相互依存のまとまり(システム)をなすが、そのシステムの内容はナゾである」という意味で、一応、カッコに入れて『暗函』(dark box)として取り扱い、一定の操作を媒介としない仮説の導入による説明を拒否する「科学的方法」)に対して彼が感じていた距離感を示す一例ではないだろうか。もちろん永井は、「操作的

「方法」の存在意義を認めていないわけではない。また、モーゲンソーが人間性を主な源泉とする権力闘争の「時と場所を超えた普遍性」を強調する一方で、その時間的・空間的な個別性を理解しようとしていたことにも、おそらく気づいていただろう。⁴⁶しかし、そもそも永井にとって行為者の「意図」はブラックボックスに入れたり演繹的に仮定したりするよりも帰納的に了解するものであった。動機の理解は「無益であると同時に人を誤解させる」ものというよりも、社会科学における「最初の自然発生的プロセス」(レイモン・アロン)であった。⁴⁷

「この世で人間は、人間的実存を共有しており、そのかぎりでは、未開人の行動も了解・納得できる」という基本前提のもとに、行為者が自身の行動に与える意味を理解しよう。そしてさらに、「一定のカルチュアにおける人間の定型行動のもつゲシュタルトを洞察、了解してモデルをつくり、個々人のランダムな行動を一定の方向に流し込むトレンド(一般に制度とよぶ)を予測していこう」。⁴⁸これが永井のいう「了解的方法」の要諦であり、彼の見るところ、このアプローチに近かったのは、モーゲンソーよりもケナン(であり、さらにいえば、ケナンよりもホフマン)だったと思われるのである。⁴⁹

b. ネオリアリズム

以上のように考えると、同年生まれでもある、ケネス・オルツが構築した「ネオリアリズム」に対する永井の態度も、より容易に推測できよう。まず永井は、『平和の代償』において、オルツの最初の著書である『人間・国家・戦争』(一九五九年)をアロンの『諸国間の平和と戦争』とともにあげ、「国際関係のもつ国内政治との構造的相違点を強調するスタンレー・ホフマン教授と同系統のもので、深い理論的洞察で多くの示唆を与えるもの」として称賛して

いる。また、『冷戦の起源』においては、冷戦の原因をめぐる諸説をウォルツのいう「三つのイメージ」を援用して整理している。⁵⁰

たしかにアロンもホフマンも「権力闘争」という国内政治と国際政治の両方で見られる現象よりも、国内政治の行為者と国際政治の行為者が置かれる状態の相違(ルソーのいう国際政治の「戦争状態」)を国際関係理論の出発点とした。そしてウォルツも、戦争の原因を人間性に見出す「第一イメージ」の論者としてモーゲンソーをあげてその理論の一元性を批判し、「国際政治の枠組みを説明する」ルソー的な「第三イメージ」の重要性を強調している。⁵¹

しかし、二十年後に上梓した『国際政治の理論』(一九七九年)⁵²において、ウォルツがアロンとホフマンを「還元主義者」として厳しく批判したことを、永井はどう見たのであろうか。筆者の知るかぎり、この点に関する永井の見解を示す記録はない。だが、ここでも「了解的方法」の観点から推測することは不可能ではなからう。

周知のように、ウォルツは『人間・国家・戦争』で提示した三つのレベルから国際システムのレベルを切り離し、純粹に構造的な「国際政治の理論」を構築しようとした。国際システムを諸国家間の「能力の分布」と「相互作用」に峻別し、前者が後者にどのような影響を及ぼすか、とりわけ、大国が何個の場合、大戦争が起こりにくいかを分析しようとした。そして、国際構造を「能力の分布」と定義する際、「諸国家のタイプと目標」をも構造とみなすホフマンを、システム・レベルの要素をユニット・レベルの要素と混同している「還元主義者」のひとりに数えた。ホフマンのような定義を採用すれば、国際構造が国家の行動にどのような影響を及ぼすかを分析できなくなってしまうと鋭く指摘したのである。

一見、永井は、この点についてウォルツに軍配をあげているように見えるかもしれない。というのも、一九八〇年

代半ばに戦後の「長い平和」について語るようになった永井は、ウォルツ流に二極システムの「単純性、自立性、隔離性（相互依存の欠如）」に言及するのが常だったからである。⁵³しかし、注目すべきは、その際、彼が冷戦史家のジョン・ルイス・ギャディスを引くことはあつても、（ギャディスが援用した）ウォルツに直接言及することは、ほとんどなかったであろう。たしかに、ウォルツがいうように、多極システムの弱点である「誤算」よりも二極システムの弱点である「過剰反応」のほうが「より小さな悪」なのかもしれない。しかし、永井が関心を寄せていたのは、二極システム自体の普遍的安定性よりも第二次世界大戦後という特定の時代に米ソが激しい対立とせめぎあいのなかで「制度」（ギャディスのいう「暗黙のルール」⁵⁴）を生成したことであり、その媒体のひとつとして二極システムが一定の役割を果たしたということではなからうか。永井が「制度」の存在を指摘してから約二十年の歳月を経て、それが「長い平和」を支える主柱として認識されるようになったということではなかったか。

というのも、第一に、諸国家の機能的類似性を説いたウォルツとは対照的に、永井は諸国家のスタイルの違いを出発点とし、その違いの源泉を「国内の政治的経験」の相違に求めていた。能力の「配置図」だけに注目するウォルツよりも、むしろ「誰が配置されているか」を知らなければ能力の評価もできないし、歴史的状況の素描もできないと主張するホフマンに、やはりここでも共感していたのではないか。⁵⁵そして、アナキー下に置かれた「生き残り」を望む国家は、結果的に勢力均衡を形成するものだというウォルツの主張を、まさに結果論としてのみ受け入れていたのではないか。

第二に、永井の主要な関心は、そもそも、国際構造と国際的結果の間の因果関係の確定よりも、「制度」の生成を視野に入れた「拘束と選択」の範囲の画定にあつたはずである。この点を考慮に入れれば、「理論」を因果関係の説明と

みなしたうえで、経済学理論が「市場の理論」と「企業の理論」に分けられるように、国際関係理論も「国際政治の理論」と「外交政策の理論」に分けて構築されるべきだと説くウォルツよりも、「国際関係の理論は、抽象的なレベルにおいてさえ、内生変数と外生変数を区別することができない」という点において、経済学理論とは異なる」と説くアロンに、やはり永井は賛同していたのではないか。⁵⁶そして、二極システムが安定的であるというウォルツの構造的結論は、(C・W・ミルズの構造的権力論のように) 時と場合によっては無力感をもたらすだけに終わる、つまり、実践性に乏しいと考えていたのではなかろうか。

c. オフエンシヴ・リアリズム

このように見ると、ジョン・ミアシャイマーが『大国政治の悲劇』(二〇〇一年)⁵⁷で完成させ、それ以降クローズ・アップされるようになった「オフエンシヴ・リアリズム」を、永井ならどう評価したかも、ある程度は推測されよう。ミアシャイマーは、ウォルツが人間性ではなくアナキーという国際システムの構造に国家間の権力闘争の源泉を見出している点を高く評価しながらも、他方でウォルツの理論には「現状維持への偏り」があると指摘した。「システムが国家に促すのは、安全保障という目標を追求することである」とウォルツはいうが、それは本当なのだろうか。自己保存に成功した国の行動を他の国は模倣するとウォルツはいうが、それはバランシングだけなのか。「国家の第一の関心事は、パワーを最大化することではなく、システムのなかで自国の地位を維持することである」とウォルツは結論するが、果たしてそうなのか。

こうした問題を提起するミアシャイマーは、第一に、国際システムはウォルツが仮定するよりもはるかに厳しいホッ

ブズ的狀況にあると、第二に、すべての国家は相手国が何を考えているのかを完全に知ることはできず、軍事力を使つてこないとは確信できないと主張した。そして、こうした「アナキー」と「意図」の問題を抱えるがゆえに、国家の目標が現状維持にとどまることはほとんどなく、「初めは防御的な意図で行動する国家も国際システムの構造によって攻撃的に考え、時に攻撃的に行動するように強いられる」。つまり、大国にとって安全を確保する最善の方法はパワーを最大化することであるから、国家の究極目標は（地域的な）覇権国の立場を得ることになるはずだと論じたのである。⁵⁸

こうした「オフエンシヴ・リアリズム」に対して、永井は、「ネオリアリズム」に対してと同様に、やはり「理論」と「現実」との乖離、そして「実践性」の乏しさを感じるのではないか。もちろん、この「現実」との近さと「実践性」こそ、まさにミアシャイマーが「オフエンシヴ・リアリズム」のセールス・ポイントとみなしているものである。自分の「国際政治の理論」は国際システムのレベルだけを説明するものであつて実際の政策を説明はできないし、ましてや「どうすべきだ」といった処方箋を提供することはできない。こう述べるウォルツとは異なり、ミアシャイマーは、国家が「システムのなかで自国の地位を維持する」ものだというウォルツの仮定が間違っているのは、そうした大国を「世界政治のなかで見つけることはほとんど不可能だから」だという。そして、国家は覇権を追求するものと仮定すれば、「国際政治の動きをかなり説明できる」し、「二十一世紀の大国間の政治の行方を予測」できる。つまり、「オフエンシヴ・リアリズム」は、「暗い部屋のなかの強力な懐中電灯のようなものであり、隅々は照らせなくても、ほとんどの場合われわれが暗闇のなかを進むときの有効な道具となる」とミアシャイマーは述べている。⁵⁹

しかし、永井が「オフエンシヴ・リアリズム」に興味を示す可能性は高いとしても、それを完全に受け入れること

はないであろう。実際、永井は、最後の本格的な論考になる一九九二年のシンポジウムにおける研究発表⁶⁰のなかで、ミアシャイマーをとりあげた。だが、彼が「オフェンシヴ・リアリズム」と類似した論理を駆使して二年前に発表していた「バック・トゥー・ザ・フューチャー」という論文⁶¹に言及し、そこで展開される議論の切れ味の鋭さを称賛しながらも、その構造的結論に完全に同意することはなかったのである。

第一に、永井は、冷戦後の世界が「不安定」を特徴とするだろうというミアシャイマーの予測に共感していた。しかし他方で、二極構造の消滅と多極世界の出現という構造的理由をあげるミアシャイマーに対して、永井は、それとともに生じつつある「制度」の融解の重要性を主張した。ソ連が崩壊し、ユーゴスラビアをはじめとする各地でナショナリズムが噴出するなかで、「国際法や国連その他メタ制度と呼ばれる形式的な機構の枠組みと、それを支えている内実の面、経済・文化そして民族の多様性、力の均衡であるとかそういうものの間のギャップが今日ほど激しくなっている時代はないのではないか」と永井は考えていたのであり、それゆえに世界の「不安定」な将来を見通した⁶²のである。

第二に、理論の第一の役割を予測⁶³と考えるミアシャイマーとは異なり、永井はレイモン・アロンと同様に「われわれの知識の限界と歴史的選択の条件の双方を示すこと」に理論の意義を見出していた。演繹的な仮説を性急に設定して、それが当たるかどうかを検証するよりも、まずは十分な帰納的研究が必要である。構造的変化が完了する、遠く不確実な未来に何が起こるかを予測するよりも、現に存在する「現実」を分析しなければならない。国際システムの構造と同様にそのプロセスを、そして各国の国内構造や政治的行為者のもつイメージを了解しなければならぬ。

というのも、アロンがいうように、国際関係においては「主要な行為者が、市場における平均的企業のような形で

システムに従属することはありえない。国際システムの構造は、つねに寡占的である。いかなる時代においても、主要な行為者は、システムによって決定される以上にシステムを決定してきた」。あるいは、少なくともホフマンが指摘するように、「『結果』が『ユニットによって決定されるもの』か『システムによって決定されるものか』は、経験的研究の問題」である。⁶³ こう永井は考えていたと思われるのである。

第三に、永井は同じ一九九二年のシンポジウムを総括するなかで、冷戦後の世界を「カオス」と特徴づけたうえで、それが「『周期性のない振動』」のことで、予測不可能ではあるが、一つの秩序でもある、という奇妙な性格を持っている」と定義した。そして次のように述べた。

こういうふうな時代になってきて、政治学者とか社会学者がいう予測というものもカッコつきのものであって、絶えず科学的事実が出てきて、それによって、「制度」として繰り返される慣行の束というものが攪拌されていく。それを偶発革命という言葉を使っている学者がいますけども、制度の融解によって予測不可能なカオスというのが出てくると。

しかし、カオスというのは同時に可能性を孕んでいる訳であります。さっきいわれた「結婚」という制度、つまり定型行動の束に拘束されて生きているだけではなく、そこから逸脱する可能性というのを必ず孕んでいる（笑い）。また、それで我々は辛うじて生きているという面があって、将来は何が出てくるか分からないという可能性にかけて我々は辛うじて生きているというのを結論にしたいと思います。⁶⁴

六十七歳になっていた永井は、冷戦後の世界を安定させる新しい「制度」の兆候を明確には見出すことができなかった。しかし、それを見つけ出すことは不可能ではないと自身と聴衆に言い聞かせた。まさに、国際政治を自律的に考え、それに参加していくように、「激励のメッセージ」を送ったのである。

d. ディフェンシヴ・リアリズム

以上のように考えると、「ディフェンシヴ・リアリズム」を永井ならどう捉えたかを推測することも不可能ではなからう。永井のよき理解者であり、青山学院大学国際政治経済学部と同僚でもあった土山實男は、同学部紀要の「永井陽之助教授退任記念号」に寄せた論考で、「私自身の関心から」と断りながらも、次のように述べている。「永井先生の外交・戦略論の本質は、広い意味でのリアリズム、とりわけ、セキュリティ・ディレンマを主軸とする、今日というところのディフェンシヴ・リアリズムを先取りした議論であった、という点にある」⁶⁵。この見解は、たしかにかなりの程度、的を射ているともいえようが、しかし、それが本当に「本質」を突いているかどうかは議論の余地がある。

まず「ディフェンシヴ・リアリズム」の定義から見よう。土山は、「国際政治をもっぱら物質的なパワーの構造として描く」アプローチである「オフエンシヴ・リアリズム」に対して、「セキュリティ・ディレンマを中心として、パワー関係の変動が生む、国家の『欲』と不安や恐怖に焦点を置いている」アプローチを「ディフェンシヴ・リアリズム」と呼んでいる。その代表論者は、ロバート・ジャーク・ヴァイス、ステイヴン・ヴァン・エヴェラ、チャールズ・グレイザー、ジャック・スナイダー、ステイヴン・ウォルトらであり、彼らの理論を永井が十数年先取りしていたと主張する。

永井が時に「セキュリティ・ディレンマ」に留意する必要性を説いたのは事実である。土山がいうように、日中平和友好条約の締結前には「反覇権条項」がソ連を刺激して極東軍事化の「連鎖反応」を引き起こすことを的確に警告したし、永井がロバート・ジャーヴィスのいう「核革命」論者（核兵器の役割を「戦略防衛」よりも「抑止」に置く論者）のひとりであったことも間違いはない。また、永井の核抑止論の背後に、後の「ディフェンシヴ・リアリスト」たちが多用した「攻撃と防衛のバランス」（攻防のいずれにコストが多くかかるか）の計算があることも疑いなかろう。

しかし、「オフエンシヴ・リアリズム」との論争で明らかになっているように、一般に「ディフェンシヴ・リアリズム」は、国際関係におけるアナキーを「オフエンシヴ・リアリズム」が仮定するほど過酷なものではないと演繹的に仮定している。そのうえ、その穏健なアナキー下で、国家は「持っているもの以上のものは求めない・・・既存のバランス・オブ・パワーの維持に集中する」と仮定している。彼らによれば、そうした正常かつ賢明な「合理的選択」を変えるのが「セキュリティ・ディレンマ」の悪化である。そして、それをもたらすのが「攻撃と防衛のバランス」における「攻撃」の優位（あるいは、「攻撃」が優位になったのではないかという政策決定者のパーセプション）や、国家自体の「強さ」（統合力）の低下なのである。⁶⁶

ここで想起すべきは、永井がとっていたのが本質的に帰納的アプローチだったということであり、その際にまず目指していたのは「歴史的状況」の把握だったということであろう。アナキーを「オフエンシヴ・リアリズム」のように過酷なものと捉えるか、「ディフェンシヴ・リアリズム」のように穏健なものと捉えるかは、永井にとつては、「諸国家のタイプと目標」の分析を含む経験的研究の問題だったのではないか。同じように、行為者が覇権国の地位を追求するか（勢力圏の拡大は容易か）、既存のバランス・オブ・パワーの維持に専念するか（勢力圏の拡大は困難か）も、

永井にとつては、「客観的」・演繹的に仮定する問題ではなく、帰納的に了解する事項ではなかったか。つまり、永井が目指したのは「合理的選択」(rational choice)ならぬ「了解可能な選択」(reasonable choice)の理解であり、それは、国際環境のみならず、「その国民の多年にわたる社会生活、国内の政治的経験」をも含む「歴史的状況」から推測されるものではなかったか。

たしかに、物質的なパワーだけでなく行為者のパーセプションを重視するアプローチを永井なら相対的に高く評価したはずだと考えることに間違いはなからう。しかし、「ディフェンシヴ・リアリスト」の多くが、ウォルツとともに理論の「簡潔性」(変数の数の極少化)を、そして、その一部は、それに加えて「還元主義」の極小化(個人レベル/国内レベルの変数の極少化)をも目指していることに、われわれは留意すべきであろう。というのも、この点、永井は、むしろ、「モデルから現実へ移行する際に基本的な変数を再導入しなければならないような方法は、有益とはいいたくない」と述べながら『オッカムの剃刀』への過度の配慮⁶⁷に警告を発したホフマンに共感していたと思われるからである。

「攻撃と防御のバランス」のパーセプションに影響を与える要因をジャーヴィスのように軍事技術と地政学的位置に絞るならば、それでは不十分だと永井ならいうであろう。⁶⁸ 同盟形成の論理を「脅威の均衡」に求め、その構成要素を「物質的パワーの総量」「意図」「攻撃能力」「地理的近接性」に見出すウォルト、戦争の原因を「攻撃と防御のバランス」「第一撃の有利さ」「パワー変動の規模と頻度」「パワー資源の累積性の高さ」に関するミス・パーセプションに見出すヴァン・エヴェラに対しては、その理論をたしかにかなり高く評価するだろう。⁶⁹ しかし、やはり(彼らの師であるウォルトが焦点を当てた)国際システムのレベルのみならず「その国民の多年にわたる社会生活、国内の政治的経験」など

の国内レベルをも含む「歴史的状況」を実際にどう捉えるかがカギだと説くのではないか。つまり、誰が、誰と、どのような状況下で、どのような同盟を組み（あるいは、どのような戦争をし）、それが、その時代の国際秩序の「制度化」にどのような影響を与えるかを知ることが肝要だということではないか。つまり、状況の全体への参照が、分析の前提となるというのではないか。⁷⁰

こうして永井のアプローチの本質は、「クラシカル・リアリズム」にも「ディフェンシヴ・リアリズム」にも、ましてや「ネオリアリズム」にも「オフエンシヴ・リアリズム」にもない。それは、やはり「実践的思惟」にあると思われるのである。

(注)

⁴³ この点については、土山實男「国際政治理論から見た日本のリアリスト——永井陽之助、高坂正堯、そして若泉敬」、日本国際政治学会編『国際政治』第一七二号「国際政治研究の先端 一〇」（二〇一三年二月）、一一八ページ、参照。土山は、永井がリアリストたちの議論にほとんど言及しなかった理由を、彼らが永井にとって「当たり前」のことを書いていたからであり、永井の関心は「例外的なケース」に向かっていたからだとして論じている。

⁴⁴ 永井陽之助編『政治的人間』（平凡社、一九六八年）。なお、ホッファアの国際政治観については、中本義彦「エリック・ホッファアとベトナム戦争」、作品社編集部編『エリック・ホッファア・ブック』（作品社、二〇〇三年）、所収、八〇〜九一ページを、アーレントの国際政治観については、パトリシア・オーウェンズ、中本義彦・矢野久美子訳『戦争と政治の間——ハンナ・アーレントの国際関係思想』（岩波書店、二〇一四年）を参照。

⁴⁵ Hans J. Morgenthau, revised by Kenneth W. Thompson, *Politics among Nations: The Struggle for Power and Peace*, Sixth Edition (New York: Knopf, 1985), p. 5. 邦訳（ただし改訂第五版）『現代平和研究会訳』『国際政治——権力と平和』（福村出版、一九八六年）五ページ。

なお、スタンレー・ホフマンは、すでに一九五九年の論文でモーゲンソーのアプローチを厳しく批判して、自身のアプローチとの違いを強調していた。すなわち、国際政治を権力闘争とみなすモーゲンソーに対して、ホフマンは、そのように一元的に捉えてしまつては「政治指導者たちが、なぜ特定の場合に、特定の方法で行動するのかが明らかにされない」と指摘した。「権力」という永続的な概念とそれによって定義される「国益」は、十八・十九世紀のヨーロッパのように「すべての行為者がほとんど同じ信条をもっている場合」には適合するが、それ以外の時代には決して多くを語らないとホフマンは主張した。そしてそのうえで、レイモン・アロンという「歴史社会学」を採用したのである。Stanley Hoffmann, "International Relations: The Long Road to Theory," *World Politics*, Vol. 11, No. 3 (April 1959), pp. 349-355, 365-377. 邦訳、中本義彦訳「国際関係論——理論への長い道のり」、『スタンレー・ホフマン国際政治論集』（勁草書房、二〇一一年）、所収、三三〇～三三九、五〇〇～六三三ページ、参照。

⁴⁶ モーゲンソーの理論のこうした側面については、中本義彦「リアリズムとは何か——理念型と思想の間」『法政研究』第十巻三・四号（二〇一四年三月）、三六九～三八二ページ、参照。

⁴⁷ Raymond Aron, *Introduction to the Philosophy of History*, p. 11. 邦訳、前掲『歴史哲学入門』、一七ページ。なお、アロンとモーゲンソーのアプローチの違いについては、中本義彦「レイモン・アロンの『リアリズム』批判」『法政研究』第九巻四号（二〇〇五年二月）、六一～二〇二ページ、参照。

⁴⁸ 前掲「哲学の再建」、八六～八八ページ。

⁴⁹ 「操作的方法」と「了解的方法」については、前掲『現代政治学入門』、二二二～二二五ページ、参照。永井がリースマン的／ホフマン的アプローチを「了解的方法」として理解していたことは、『平和の代償』の「参考文献」における、「諸国間の平和と戦争」（一九六二年）に関する次のような解説を見ても明らかであろう。「スタンレー・ホフマン教授の恩師にあたる、レイモン・アロン教授の力作である。マックス・ウェーバーに造詣深いアロン教授は、現代の国際状況の本質的な「不確実性」における外交＝戦略的行動（その担い手は、外交官と軍人である）を、社会的に意味了解することを通して一種の雄大な国際法社会学（ないし、国際関係論）を建設しようと試みている。」前掲『平和の代償』、二〇四ページ。

⁵⁰ 前掲『平和の代償』、二〇四ページ、および、前掲『冷戦の起源』、五九ページ、参照。

⁵¹ Kenneth N. Waltz, *Man, the State and War: A Theoretical Analysis* (New York: Columbia University Press, 1959), p. 238. 邦訳、渡邊昭夫・岡垣知子訳「人間・国家・戦争——国際政治の三つのイメーシ」(勁草書房、二〇一三年)、『二一七ページ』。

⁵² Kenneth N. Waltz, *Theory of International Politics* (New York: Random House, 1979). 邦訳、河野勝・岡垣知子訳「国際政治の理論」(勁

草書房、二〇一〇年)。

⁵³ 例えば、永井陽之助「宇宙のノモス——戦後平和と戦略防御」、日本国際政治学会編『国際政治』日本国際政治学会創立三〇周年記念号「平和と安全——日本の選択」(一九八六年一〇月)、七ページ。

⁵⁴ John Lewis Gaddis, "The Long Peace: Elements of the Stability in the Postwar International System," in *The Long Peace: Inquiries into the History of the Cold War* (New York: Oxford University Press, 1987), p. 238. 邦訳「宮坂直史訳「長く平和——戦後国際システムにおける安定要素」」、五味俊樹他訳『ロン・ブース——冷戦史の証言「核・緊張・平和」』(岩書房、二〇〇二年)、所収、四〇六ページ。

⁵⁵ Stanley Hoffmann, *Primacy or World Order: American Foreign Policy since the Cold War* (New York: McGraw-Hill, 1978), p. 146. 実際「永井は「米国の戦争観と毛沢東の挑戦」以降、国内政治の分析をさらに重視するようになったという見方もできる」というのも、米ソが暗黙裡に手を結んで「状況型」の戦略思想をもつ中国を孤立化させるといふ永井の予測は、部分的に外れていたことが後に明らかになり、永井はその原因のひとつをアメリカにおける「外交政策の決定と、国内構造のからみあい」の分析の不十分さに求めて、この問題を克服しようとしたからである。この点については、Yoshihiko Nakamoto, "Japanese Realism and Its Contribution to International Relations Theory," *Issues and Studies*, Vol. 33, No. 2 (February 1997), p. 78 参照。

⁵⁶ Raymond Aron, "What is a Theory of International Relations?" in John C. Farrell and Asa P. Smith, eds., *Theory and Reality in International Relations* (New York: Columbia University Press, 1968), p. 13. 邦訳「岡本順一訳「国際関係の理論とはなにか」』『国際関係の理論と現実』(法律文化社、一九七一年)、二二二ページ。

⁵⁷ John J. Mearsheimer, *Tragedy of Great Power Politics* (New York: W. W. Norton, 2001). 邦訳「奥山真司訳『大國政治の悲劇——米中は必ず衝突する!』』(五月書房、二〇〇七年)。

⁵⁸ *Ibid.*, pp. 18-20. 邦訳「同上書、三八〜四三ページ、参照。

⁵⁹ *Ibid.*, pp. 8-12. 邦訳「同上書、二四〜二九ページ、参照。

⁶⁰ 永井陽之助「歴史の中の冷戦」、永井陽之助・土山實男編『秩序と混沌——冷戦後の世界』(人間の科学社、一九九三年)、所収、一六〜四五ページ。

⁶¹ John J. Mearsheimer, "Back to the Future: Instability in Europe after the Cold War," *International Security*, Vol. 15, No. 1 (Summer 1990), pp. 5-56. なお「ミロシヤイバーとスタンレー・ホフマン」ロバート・ロウインの間で交わされた論争「Stanley Hoffmann, Robert O. Keohane, John J. Mearsheimer, "Back to the Future, Part II: International Relations Theory and Post-Cold War Europe," *International Security*, Vol. 15,

No. 2 (Fall 1990), pp. 191-199 も参照。

⁶² 前掲「歴史の中の冷戦」三三ページ。

⁶³ Raymond Aron, *Peace and War*, p. 95. および Stanley Hoffmann, *Primacy or World Order*, p. 146.

⁶⁴ 永井陽之助「おわりに」前掲「秩序と混沌」所収。三二九〜三三〇ページ。「混沌をどう見るか」という永井の問題意識を考えようでは、苅部直「混沌への視座——国家と暴力をめぐる」、苅部直「秩序の夢——政治思想論集」(筑摩書房、二〇一三年)、所収、二二三〜二七ページも参考になる。なお、スタンレー・ホフマンは、十五年後の二〇〇六年に上梓した最後の著書を「カオスと暴力」と題すことになった。⁶⁵ Stanley Hoffmann, *Chaos and Violence: What Globalization, Failed States, and Terrorism Mean for U.S. Foreign Policy* (Lanham, MD: Rowman and Littlefield, 2006). 両者の問題意識の共通性を示すものもある。

⁶⁵ 土山實男「永井政治学の偉業を称えて——リアリズム政治学の本質」『青山国際政経論集』永井陽之助教授退任記念号、第五〇号(二〇〇〇年六月)、四八ページ。

⁶⁶ 「ライフエンシヴ・リアリスト」による、明示的な「合理的選択」理論の例として、Charles L. Glaser, *Rational Theory of International Politics: The Logic of Competition and Cooperation* (Princeton, NJ: Princeton University Press, 2010), Chapter 3 参照。「国家の統合力」の低下を独立変数に、「過剰拡大」を従属変数に設定した「ライフエンシヴ・リアリスト」の代表的業績として、Jack Snyder, *Myths of Empire: Domestic Politics and International Ambition* (Ithaca, NY: Cornell University Press, 1991) を参照。ファリード・ザカリヤは「スナイダーの理論に国際システムの圧力への考慮が欠けている」と指摘している。⁶⁷ Fareed Zakaria, "Realism and Domestic Politics: A Review Essay," *International Security*, Vol. 17, No. 1 (Summer 1992), pp. 177-198 参照。また、チャルマース・ジョンソンは「スナイダーがあげた日本の「過剰拡大」のケースについて、その起源が(スナイダーのいう)一九三〇年代の日本政治の「カルテル化」よりも一八八九年の明治憲法発布と一九〇五年の対露戦争勝利と朝鮮併合にあることを、そして、その時代に生きた日本人の多くが(スナイダーのいう)一九三一年の満州占領よりも朝鮮併合を「過剰拡大への重大な一歩」と考えたことを鋭く指摘している。⁶⁸ Chalmers Johnson, "The State and Japanese Grand Strategy," in Richard Rosecrance and Arthur A. Stein, eds., *The Domestic Bases of Grand Strategy* (Ithaca, NY: Cornell University Press, 1993), pp. 201-223. 邦訳、中本義彦訳「日本の権力基盤とその探究——三つのアプローチをめぐる」『歴史は再び始まった——アジアにおける国際関係』(木鐸社、一九九四年)、所収、四三〜四八ページ、参照。

⁶⁸ Stanley Hoffmann, "Theory and International Relations," in *The State of War*, p. 9. 邦訳、中本義彦訳「理論と国際関係」前掲「スタンレー・ホフマン国際政治論集」所収、七九ページ。および Stanley Hoffmann, "International Relations: The Long Road to Theory," p. 360.

邦訳、前掲書、四五ページ。

⁶⁸ Robert Jervis, "Cooperation under the Security Dilemma," *World Politics*, Vol. 30, No. 2 (January 1978), pp. 167-214 参照。

⁶⁹ Stephen M. Walt, "Alliance Formation and the Balance of World Power," *International Security*, Vol. 9, No. 4 (Spring 1985), pp. 3-43. 24

35' Stephen Van Evera, *Causes of War: Power and the Roots of Conflict* (Ithaca, NY: Cornell University Press, 1999), Chapter 1 参照。

⁷⁰ この点については、永井が『現代と戦略』(一九八五年)を書こうと「大きく依拠した」Raymond Aron, *Clausewitz: Philosopher of War* (Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall, 1985). 邦訳、佐藤毅夫・中村五雄訳『戦争を考える——クラウゼヴィッツと現代の戦略』(政治広報センター、一九七八年)を参照。そこでアロンは次のように述べている。「実際、常に肝要なことは、抽象的に抑止に思いをめぐらせることではなくて、誰が誰を、何から、どのような威嚇によつて、どのような状況下で抑止しうるのかを知ることである。言葉を換えていえば、抑止の信頼性は、状況の全体への参照を前提とするものであって、決して単なる軍事的計算に帰するものではない(たとえその計算が全体の一要素ではあつても)」(p. 388; 三三七〜三三八ページ)。

おわりに

本稿では、日本を代表する「現実主義者」の一人であつた永井陽之助が自身のアプローチをどのようにして形成したかを概観し、それをアメリカの「リアリズム」との比較のなかで位置づけようと試みた。そこから浮かび上がるのは、以下のようなことであろう。

一方で、永井が「リアリズム」に近い考えをもつていたことは疑いない。彼は、「リアリスト」たちと同様に、権力政治をきわめて人間的な、除去できないものとみなしていたし、そうであるがゆえに、それを緩和させる「制度」としての勢力均衡と相互抑止を高く評価していた。日本の多くの論者が国際連合や憲法九条などの「機構」に平和の望みをかけるなかで、永井は、国際政治が「制度」の方向に動いていることを指摘し、それを「庭師」のように少しず

つ育てていくことを説いた。⁷¹ また、本稿では言及できなかったが、マックス・ヴェーバーのいう「責任倫理」を重視した点でもアメリカの「リアリスト」たちと共通していたといえるだろう。⁷²

しかし他方で、永井の「現実主義」が、アメリカの「リアリズム」とは、かなり質を異にしていることも明らかであろう。まず国内政治を研究し、三十八歳のときによく本格的に国際政治の研究を開始したという偶然も手伝って、永井は若き日に「政治意識の研究」で培った自身のアプローチを柔軟に保持し、それを効果的に国際政治の分析に適用した。⁷³ そのアプローチは、第一に、国際政治学者ではなく社会学者であったデイヴィッド・リースマンの影響を強く受けたものであり、第二に、リースマンと「非常によく似た」アプローチをとる、フランスで教育を受けた国際政治学者である、スタンレー・ホフマンの影響下に発展させられたものであった。彼らとの対話のなかで、永井は、彼自身がいう「実践的思惟」を形成したのであり、それは次の三つの大きな特徴をもっていったといえるだろう。

第一に、永井にとって、「現実」とは直接的に認識すべきものというよりもむしろ「迂回的・間接的」に把握すべきものであった。行為者の数だけ存在する「現実」のイメージを帰納的に観察し、それらを重ね合わせて、その「場」の全体像を再構成すべきものであった。行為者の動機も、演繹的に「操作」するものではなく「了解」するものであり、この作業を進めるためにも全体像（行為者が置かれた「歴史的状况」）のイメージは必要不可欠であった。

第二に、理論の第一目的は、因果関係の確定でも、それを未来に投影した予測でもなく、行為者の「効果的な選択の範囲」の画定にあった。「歴史的状况」から切り離された行為者を仮定して明快な予測を出す「局外者」の理論ではなく、行為者の立場にいったんは身を置いて「歴史的選択の条件」を探りだそうとする「当事者」の理論を永井は目指した。

第三に、永井にとって、「現実」とは、認識の対象であると同時に規定の対象でもあった。そして、そうであるがゆえに、いかなる政治理論も実践性をもたざるをえないのであり、政治学者は自分の発言の「予測しうる結果」に自覚的でなければならなかった。こうして、永井は、政治学者の一義的な役割を「公共哲学」の供給に求めた。つまり、個々バラバラの事件に意味をあたえ、全体を統合して（自身を含む）政治的行為者を「制度」の生成へと自律的に向かわせる「激励のメッセージ」の発信に政治学の存在理由を見出していた。⁷⁴

スタンレー・ホフマンの影響下に形成された、永井の「実践的思惟」は、当然ながら、後にホフマンが「アメリカン・ソーシャル・サイエンス」と呼んだ国際関係論の諸理論とは一線を画すものであった。つまり、それは、科学的方法の適用によって問題の解決は可能だと信じる「応用啓蒙主義」からも、経済学的なモデルの構築に力を注ぐ「精密科学主義」からも、そして「権力の師傳」になりたいという欲求からも解放されていた。永井自身の分類を借りれば、「アメリカン・ソーシャル・サイエンス」の多くが「操作的方法」をとるのに対して、永井の「現実主義」は基本的に「了解的方法」をとっている。換言すれば、いまなお「アメリカン・ソーシャル・サイエンス」に向き合わざるをえない国際政治学者にとって、永井の「実践的思惟」は、圧倒的に少数派ではあるが、忘れてはならないアプローチを示しているのである。

永井が「米国の戦争観と毛沢東の挑戦」を発表して五十年、亡くなって七年の歳月が流れた。国際環境は大きく変わり、日本を取り巻く状況も厳しさを増している。「状況型」の中国と「機構型」のアメリカの衝突を永井が鮮烈に描いた時代に比して、何が変わり、何が変わっていないのか。東アジアの国際関係に「制度」の萌芽は見られるのか。⁷⁵だとすれば、日本は、それをどのように促進していけばよいのか。われわれは、「操作的方法」によって華々しく展開

される諸理論に向き合い、それらが示す予測に留意しながらも、他方で、「現実」の全体像を帰納的に把握し、行為者の動機を「了解」という地道な努力を怠ってはならない。「実践的思惟」としての永井の「現実主義」は、そう忠告しているように思われるのである。

(注)

⁷¹ 「米国の戦争観と毛沢東の挑戦」を批判する都留重人の「論壇時評」が『朝日新聞』に出た後に丸山眞男研究室を訪れた永井は、この「時評」をめぐる恩師と「かなり激論をかわした」という。前掲インタヴュー「平和の代償」から四半世紀、七ページ。永井が筆者に説明してくれたところによれば、丸山をはじめとする当時の多くの知識人は、国際政治が「機構」の方向に動くべきだと考えていた。これに対して、永井は国際政治が「制度」の方向に動いていると見ていたし、それをチャンスとみなすべきだと考えていた。この違いが大きかった、ということだった。なお、永井は、「米国民は、国際問題へのアプローチで、機械工(メカニック)の手法ではなく、庭師(ガーデナー)の方法を学ばねばならない」というジョージ・ケナンの言葉(George F. Kennan, *Realities of American Foreign Policy*, Princeton, NJ: Princeton University Press, 1954, p. 93)をよく引用した。例えば、前掲「平和の公共哲学を求めよ」一六九ページ、参照。

⁷² アメリカのリアリストたちと「責任倫理」の関係については、Michael Joseph Smith, *Realist Thought from Weber to Kissinger*、邦訳、前掲「現実主義の国際政治思想」を、永井の「責任倫理」論については、例えば、永井陽之助「解説 政治的人間」、前掲「政治的人間」、所収、四〇〜四一ページを参照。

⁷³ そのうえ、アメリカの外交政策や国際政治理論の背後にある「アメリカン・リベリズム」の「無葛藤性」と「機構性」には人一倍敏感で、「リアリスト」たちによるアメリカ外交の「法律万能の道義主義的アプローチ」の分析を積極的に受容する一方で、彼ら自身も、その「イデオロギー性」から完全に解放されてはいないことを鋭く見抜いていた。

⁷⁴ そのメッセージの相手は、「権力者」よりもむしろ「新中間層」であった。たしかに永井は、佐藤栄作政権時の「国際関係懇談会」「カナマロ会」「沖繩基地問題研究会」「沖繩返還と防衛問題研究会」など、日本政府関連の研究会にもいくつか参加した。しかし、そもそも大衆社会の研究を原点にしていた彼の政治学は、本来、「権力の師傳」よりも「公共哲学の供給」をめざすものであり、永井にとって、それこ

そが政治学者がとるべき「実践」であった。一九八五年に上梓した『現代と戦略』のなかで、永井は「われわれ現実主義者も、いつしか論壇の主流となり、いわば体制のなかにくみいられ、理想主義者の凋落につれて抵抗の気概もうすれてきた」（一七ページ）と反省の弁も述べている。

なお、「国際関係懇談会」については、その『速記録』を、「カナマロ会」については、黒崎輝「日本核武装研究（一九六八年）」とは何だったか、日本国際政治学会編『国際政治』第一八二号「転換期のヨーロッパ統合」（二〇一五年一月）、一二五～一三九ページ、「NHKスペシャル」取材班『核を求めた日本——被爆国の知られざる真実』（光文社、二〇一二年）、七六～八一ページ、および、中日新聞社会部編『日米同盟と原発——隠された核の戦後史』（中日新聞社、二〇一三年）、一二五～一三一ページを、「沖繩基地問題研究会」と「沖繩返還と防衛問題研究会」については、岡倉古志郎・牧瀬恒二編『資料 沖繩問題』（労働旬報社、一九六九年）、五三二～五七七ページを参照。

⁷⁵ そうした分析に近い例として、ホフマンの教子子でもあつた Yuen Foong Khong の “East Asia and the Strategic ‘Deep Rules’ of International/Regional Society,” in Barry Buzan and Yongjin Zhang, eds., *Contesting International Society in Asia* (Cambridge, UK: Cambridge University Press, 2014), pp. 144-166 参照。

⁷⁶ 例えば、「オフエンシヴ・リアリスト」のミアシャイマーの次のように述べて、論争を巻き起こしている。「冷戦史や、米中両国が核武装しているという事実から考えれば、予見できる将来においてこの二国が互いに戦争を仕掛ける可能性は低いと推察すべきなのかもしれない。ところがこの結論は間違いだ。核兵器の存在は確かに戦争を避けようとする強力なインセンティブにはなるが、アジアにおける将来の米中間の競争は、冷戦期のヨーロッパの場合よりも戦争の起こりやすい状況の中で行われることになるのだ。とくに地理とパワーの分布状況は冷戦期と異なっており、これが米中間の競争をさらに起こりやすいものになっている。」John J. Mearsheimer, *The Tragedy of Great Power Politics*, Updated Edition (New York: W. W. Norton, 2014), p. 395; 邦訳、奥山真司訳『大国政治の悲劇——米中は必ず衝突する！』[改訂版]（五月書房、二〇一四年）、五二四ページ。なお、この点をめぐるミアシャイマーとズビグニェウ・ブレジンスキーの論争、John J. Mearsheimer, “Clash of the Titans,” A Debate with Zbigniew Brzezinski on the Rise of China, *Foreign Policy*, No. 146 (January-February 2005), pp. 46-49 を参照。